

# 教育と産業

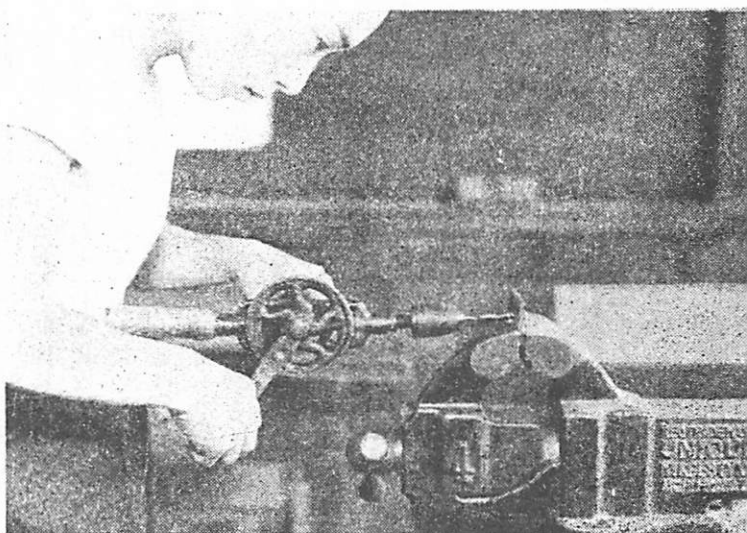
産業教育研究連盟

第五卷 第七号

女子に技術教育は必要か……………宮原 誠一…	1
科学技術教育の振興と 職業・家庭科の課題……………鈴木寿雄…	4
中学校に一般教育としての 技術教育はなぜ必要か……………本山政雄…	9
小学校の産業教育をどうつかむか ……………大田 卓…	12
高田集会・連盟提案のあらまし ……………第1群・家庭科研究部会…	16
教育を確実なものにするために…伊藤忠彦…	22
職業・家庭科をこう考える ……………高橋太郎・西尾幸子…	27
会 員 名 簿 (3)	

8 月

増 大 号



(ハンドドリル)

## このごろ困ること

事もなげに研究、研究というけれども、いつたいこのせわしない世の中の、このせわしない職場で、年がら年中寸暇をさいて、一つことを考え、しらべていくというのは、容易なわざではない。かりに最近つきつきと刊行される実践記録を覗んだり、研究会などですぐれた報告をきいたりしても、すぐさま、ようし、おれだつてやれる、と意気こめる人がどれほどあるだろう。すごいもんだ、しかし、——おれには、(あるいは、おれの学校では)とてもできないなあ、といったたぐいの感銘のしかたも、少なからず生れるにちがいない。人がみな、われより偉く見ゆる日よ……花を買うべき金もなく、親しむべき妻もなかつたりしたら、事はいよいよ悲劇というものだ。そんな悲劇がくりかえされれば、つまるところは、おれのまわりには研究のできる条件がないから、とか、おれには元来研究の能力がないから、などという前置きがロウ固としてうちたてられて、研究は永遠に棚上げのウキ目を見るかもしれぬ。研究意欲のモラトリアムである。

生徒をなぐり殺した先生がいたという。あのニュースをきいて、親たちはまず、学校さえもわが子のいのちをねらっているのかと、世にも頼りない思いをいだいたろう。教師たちからいえば、はなはだ迷惑なこと、あれは特別のケースです、あんなことは、新教育の精神からはずれた方に一つ、いや、五十万に一つの事故です、皆さんのお子さんは絶対に心配ありません、と訴えたいところである。たしかに、その通りである。その通りだけれども、しかし、さいげんもない親たちの心配に対して、絶対の安心を保証できるかどうか。殺しはしない、というのではなくて、りつばに生かす、ということについてである。逆の場合、つまり生徒が先生をなぐつたりおどかしたり、という方のニュースも、残念ながら列挙にこと欠かない。あげくのはてに、オマワリサンに来てもらつたり、臨時休校で切りぬけたりしても、それが生徒をりつばに生かしたことになるはずはない。新聞ダネにならないうまでも、おどかしたりすかしたり時には見て見ぬふりをしたり、とにかく教育指導のはるか手前のところで苦心さんたんしながら、この頃の子どもはまつたく手におえ

ない、と困りぬいている風景をけつして、特別のケース、などとはいえないだろう。

困っている親たちは、それが子ども自身のせいではなくて、世の中のせいだということを見ぬいている。時には、だから修身科を復活させればなどと脱線もするが、愛情が生んだ正しい発想だといわなければならぬ。そこで教師が、自分の困りようを子どもにせいでにしていただけのもちろん問題にならないが、さりとて、親たちと一しよになつて、世の中のせいばかりしていてもよいものかどうか。つまり、そういう世の中とは何なのかそこに生きる子どもたちが、何をとも何かに反撥するのか、そのあたりをときほぐし組みなおしていくことこそ、教師が自らをすくい、社会の信頼にもこたえる途なのだと思う。ずいぶんまわりくどい話だけれども、つまり研究というのは、困っていることから出発するのだというだけのことである。

# 女子に技術教育は必要か

宮原誠一

中学校で女子に技術教育は必要か。ぜったいに必要である。

しかし、その必要性は一般にあまり理解されていない。この無理解がどこからくるかといえば、つぎの三つのすじがひびきあっているようである。

第一のすじは、そもそも普通教育における一般技術教育の意義が理解されていない。

第二のすじは、やはり依然として男女の差別観がひろくふかくなっている。そして、家政ないし主婦のはたらきについてのあやまった観念がはびこっている。

第三のすじは、教育を複合的な過程として組立てようとしないうで、じきにあれかこれかの二者択一的な考えかたをする。たとえば家庭科についていうと、生活技術か家族関係か、とか、生活技術の前に家族関係を、とかといった式の考えかた。

まず、第一のすじについて考えてみよう。普通教育ではソロバンぐらいにしておいて、数学はやらなくてもよい、といったら、ひとはどんな顔をするだろう。理科はやるにおよばないといったら、ひとはなんとこたえるだろう。おそらく、たいていのひとが「じょう

だんじゃない、寺子屋にかえる気かい。」とでもいうことだろう。

現在の日本で一般技術教育を普通教育に加えないということは、数学や理科をやらないうのと同じぐらいに寺子屋的なことである。そのうえ、こうもいえる。いくら数学や理科をやっても、一般技術教育をやらなければ、数学や理科の学習はほんとうに国民の力にはならない、と。

数学や理科で学んだことが、現在のおが国の主要な産業部門に共通する最も基礎的な生産技術についての理解というすじみちで作業場や農場の実際活動のうえに応用される。そこでふかめられた観念や能力が逆にまた教室での数学や理科の学習を活気づけ、たかめてゆく。そういう学習経験をつうじて、数学も理科もはじめて真に生産的な知的能力として明日の国民——働く大衆の身についてゆく。

さらにまた、社会科学を中心におこなわれる国民経済についての一般的理解をやしなわせる学習も、一般技術教育における生産技術面からの国民経済の学習とむすびあわされることによって、はじめて真に生きたものとなる。だから、社会科学・自然科学・生産技術の素養を国民大衆のものにしようとするならば、義務教育学校におけ

る普通教育においてこの三領域の基礎的学習がちゃんと系統立てられ、総合されなくてはならない。

さて、一般技術教育の重要性について共通の理解が成り立ったとしても、女子にも男子と同様に一般技術教育が必要かどうかということになると、かならずしも意見は一致しない。いや、むしろ、なるほど一般技術教育は男子には重要だが、女子にはいらぬのではないかとこの考えかたのほうが優勢であろうと思われる。

そこで、第二のすじが出てくる。女子は一般に家庭の主婦になるのだから、生産技術はいらないだろう。国民経済についての一般的理解といつても、女子のばあいは、家政ということ消費経済についてひととおりのことがわかればよいのだから、重要産業部門に共通する基礎的技術というようなことは男子だけでよいではないか。早くいえば、こういう考えかたである。

こういう考えかたにたいしては、つぎの二つのことを指摘しなくてはならない。第一に、国民としての、投票者としての男女の平等について真剣に考えるかぎり、したがって、政治・経済・社会について男女がまったく同等の知見をもつことをもとめるかぎり、一般技術教育は女子にもひとしくあたえられなければならない。

第二に、家政といい、消費経済というけれども、家庭は生命の再生産がおこなわれる一つの経営体であり、「台所経済の本質は、食料の加工および仕上げの経済」(大熊信行※)であることによく代表されているように、そこでは衣食住についての生産活動の体系がいとなまれるのであって、生産技術と相つうする技術的な活動が必要とされるのであるから、この面からいってもまた、男子とひとしく女子にも一般技術教育があたえられなければならない。

※大熊信行著『結婚論と主婦論』(新樹社、昭和三十二年)一八七ページ以下

このようにみると、中学校における一般技術教育の教科である「職業・家庭科の職業コース」は、できるだけハバひろく男女共通にすることがのぞましい。ことに、現在の文部省の学習指導要領という第二群、すなわち工業技術的学習はぜひ女子にもひろく課したい。指導要領で、「機械」では「整備修理」、「電気」では「保守修理」だけが共通の指定を受けていることは、いかに一般技術教育の意義が理解されていないかをよくものがたっている。金属加工や電気機器製作などこそ、男女共通にやらせるべきである。

困難な問題は、男女の性別にあるのではなく、中学校の経営そのものの実情にあるといわなくてはならない。一般技術教育のための施設・設備のこと。教員の編成およびその指導力のことと。そしていっそう根本的には、学級定員の過大。このさいこの点は、他の教科のばあいとはその困難さは比較にならない。こうして、現状ではそもそも一般技術教育の存立が可能か否かをさえ問わなくてはならない。

せめて、二群のうちのどれかひとつの分野でも、しっかり学ばせたい。男女共通で、じっくりやらせたい。そのようにこころざして一般技術教育の第一歩をふみだすひとたちが、ようやく現場にあらわれだしているとき、大勢はむしろ逆転気味で、いっそ女子は家庭科だけにしたらどうか、現状がまあだいたいそうなんだから、はっきりそうしたほうがさっぱりしていいではないか、というような声さえ聞く。まことに短慮である。そうした短慮とからみあって出てくるのが第三のすじであって、「技術主義」などということが無責任につかわれたりするのである。社会経済関係を無視して技術の

末に子どもたちの関心をとじこめてしまふ。貧しさと抑圧にゆがめられている家族関係・家族生活の現実のなかでなんの生活技術だらう。そういうことは、たしかにじゅうぶん警戒しなくてはならないことである。事実、そうした「技術主義」(というよりも勤労主義ないし技能主義だが)は相当現場にひろまっている。

しかし、そこから、生産技術よりも社会関係を、というような二者択一的な線をうちだすことはひじょうなあやまりである。前に述べたように、必要な学習の諸系統を組み立てることに総合することが教育の苦心であって、問題はあれかこれかではない。まして、技術主義などといっても、技術教育らしい技術教育をやっている学校がどこかにあるのだからかといいたくなるくらいの現実である。男女共通の一般技術教育の芽をほうほうに出させ、みんなしてまもりそだてなくてはならない。

(東京大学教授)

紹介

全国教育系大学

## 職業科教育研究会

本会は昭和二九年全国教育系大学(全教)ゼミ神戸大会において仮発足し、翌三〇年東京大会職業科分科会において、一三条からなる規約が承認され、正式に発足いたしました。

この会は職業科教育について相互に連絡協調して、その研究を深めることを目的としており、その目的を達成するため、各大学における教育に関する情報連絡、職業科教育研究の促進、および共同研

究等をおこないます。したがって、この主旨に賛同する教育系大学の職業科専攻の学生を会員とし、教官およびこの主旨に賛同する教育に関係ある人人を特別会員としています。全国九地区にそれぞれ責任校をおき、八名からなる常任委員会によって運営しています。

現在事務局は東京学芸大学にあって、年三・四回「職研会報」を発行しています。二九年以来加盟大学の数はしだいに増加し、現在正式加盟二四、非公式一〇となり、同時に研究もしだいに充実してきつつあります。昭和二九年の神戸大会は情報交換程度でならみらべきものはなく、翌年の東京大会では、職業科の本質を側面から究明しようとして、「中学校職・家科における職業科と家庭科の関連」について研究しました。そして昨年愛知学芸大における大会では、職業科の本質についてレポーター制によって研究発表しました。この結果は「本質」をはっきり打ちだすことはできませんでしたが、技術(実践)をとおして教育する学科であるという点から、職・家科における技術を理論的實際的に裏づける必要がでてきました。そこで職・家科における技術と社会的経済的知識をいかに結びつけて教育するかを来年のテーマとして研究します。

私たちの研究会はなんといっても、教育に未経験な学生の集まりであり、それゆえに混乱や曲折がつきまとい、ともすれば実践を無視した単なる理想論となる危険性をもっています。私たちは常にこのことを自覚して研究をすすめています。職業科教育に関係ある皆様方の御援助によって、私たちの研究が正しい職業科教育確立への一助となればさいわいであります。

(文責・東京学芸大学職業科四年 稲田昌市 住所・神奈川県横浜  
市港北区大倉根町八一〇 別所保方)

# 科学技術教育の振興と職業・家庭科の課題

鈴木寿雄

職業・家庭科教育もようやく十年の経験を経てきたが、その間の教科の内部では、理論的にも実践的にもたえず反省がなされて、これを真に普通教育のなかの教科として位置づけるために真剣な努力が続けられ、三たびにわたる学習指導要領の改訂など、その成果もしだいに積み重ねられてきた。しかし謙虚に現状をかえりみると、まだまだ弱体であり、陽の当らない教科であると感じざるをえない。しかも外部からは、一方では高校入試の不当なしわよせによって不急・不用視されると同時に、他方では雇用者や父兄の無思慮な要求に悩まされたり、ゆすぶられたりしている。このようなときに、世間では「科学技術教育」振興の必要が叫ばれ、この教科もいまいちどその立場から認識と志向を新たにすべき時期に直面したようである。

1

本年度になって、文部省が明らかにした文教施策の重点は、「道徳教育の振興」「科学技術教育の振興」「社会教育の振興」の三点に示ばられているが、このうちとくに科学技術教育については、さる四月二十七日離尾文相が中央教育審議会（以下「中教審」と略す）に対して、その振興方策を諮問したのでにわかにクローズ・アップされてきた。中教審に対する文相の諮問事項は、科学技術者の養成

計画にはじまって、教育内容の改善、教員の質的向上、研究施設・設備・経費の問題から教育制度全般にまでおよんでいる。

この中教審への諮問は、第二次産業革命ともいわれる原子力産業や電子工業の発達、オートメーションの普及など、産業技術の飛躍的な革新進歩に対応するための、教育への新しい要請として結果したものであり、この意味において、昨年十一月に提出された日経連の「新時代の要請に対応する技術教育に関する意見」や、さる第二十六国会衆議院で可決された「教員養成機関の改善と充実並びに理数科教育及び自然科学研究の振興に関する決議」などは、端的にそういう国民的な焦慮を表現したものであるといえよう。

米・英・ソなどの先進諸国は、早くから科学技術の水準を高める潜在的基盤としての科学技術教育の意義を重視して、長い間にわたってその充実強化に力を入れてきたが、最近における技術革新の世界的な動向に対処して、イギリスの「技術教育拡充五か年計画」にみられるように、いっそうその刷新改善に懸命の努力を傾けている。しかるに、国土は狭小で資源にも恵まれず、多数の人口を擁するわが国のばあいは、他国にくらべてよりいっそうこの面の教育が必要であるにもかかわらず、きわめて低調で、これまでは世間一般でも全くあきれるほど無関心であった。このまま推移すれば、わが

国の科学技術は日進月歩の世界水準に立ちおくれ、他国との経済的競争に敗北することは当然の帰結であろう。ここに、科学技術教育の重要性が各方面で痛感され、その振興方策に関して、政府のすみやかな英断を要望する声が上がってきたことは、むしろおそすぎたくらいである。

## 2

したがって、科学技術教育の振興という課題は、単に一、二の教科だけのものではなく、広く日本の教育のありかたにつながる大きな問題として認識されなければならない。しかもそれには、長い間産業界や教育界の一部に底流していた新教育制度に対する不信・不満が集約されているので、新教育そのものの批判・検討という最も重大な課題を、その課題解決のなかにあわせてにならなければならない。

中教審に対する文相の諮問事項のうち、とくに下記の二項は、上記の観点から注目し価値する問題である。

(一) 科学技術教育振興のためには、中学校教育と高等学校教育、高等学校教育と大学教育との間に一貫性を持たせることが適当であるといわれているが、制度的にはどうこれをとりあげるか。

(二) 高等学校へ進学しないものに対し、中学校における職業教育的・技術教育的教養を高めるべきであるといわれているが、どのように対処すべきであるか。

すなわち、(一)は日経連の提唱による「六年制工業高校」「五年制専門大学」の構想と同じ趣旨のものであり、(二)はかつての政令改正諮問委員会の「教育制度の改革に関する答申」(昭和二十六年十一月)にみられた「普通課程中学校」「職業課程中学校」の構想とほぼ同じ思想にもとづくものである。

これらの問題はともに、徹底した科学技術教育・職業教育の実現を図るために示唆されたものであるが、「複線型への接近」という点で、中教審が今後これをどのように裁くかについては、相当活発な論議が交えられるものと予想される。

## 3

ひるがえって、科学技術教育の振興という命題と現行の六・三制とは、ほんらい矛盾するものなのかどうか、この点の究明なくして「単線型か複線型か」の議論は全くナンセンスであろう。六・三制は普通教育偏重の学制で、わが国の実情に即しないという非難をよく聞くが、戦前、複線型を採用していた当時でも、普通教育偏重の声が盛んであったし、科学技術教育がよくおこなわれたということもなかったようである。そうだとすれば、これらの非難は六・三制そのものに対してではなく、新教育の内容に向けられるべき性質のものではないだろうか。アメリカにおける六・三制の実情に照らしても上記のようにいえるのであって、小学校から大学にいたるあらゆる段階の科学技術教育の充実ぶりは、わが国のそれとくらべものにならないことは周知の事実である。

このように考えると、科学技術教育の振興という課題は、新教育の「制度」の検討にかかわるべきものではなく、もっぱらその「内容」の刷新改善にかかわるべきものである、ということがはつきりしてくる。そうすれば、ここであえて学制いじりを強行したり、教育法規を改変したりしてみても、こうした課題の解決にはなんら役に立たないということも、まためいりようにならう。

新教育の内容の改善ということは、六・三制の根本精神を堅持するという心がまえから出発するのであるから、特権階級(支配者)

のための教育——進学コース——普通教育のカリキュラムと、貧困階級（被支配者）のための教育——就職コース——職業教育のカリキュラムとを厳然と識別した過去の教育のシステムに郷愁を感じることは許されない。中教審では、こうした論理をすっかりふまえて産業界の要請に迎合することなく、明日の日本教育の輝かしい設計図を示していただきたいものである。しかもその際、内容の改善は定員過剰の「すしづめ教室」の解消、教職員の過重負担の軽減、施設・設備の充実などの行財政的措置とあわせて取り上げられるのでなければ、実効のともなわないものとなるから、後者の面もお忘れなく検討してほしい。現実には、教育の現場で科学技術教育振興上の隘路として問題になっているのは、前者よりはむしろ後者なのである。この意味では、今日六・三制に向けられている非難の大部分はむしろこの行財政面の貧困さに対して向けられるべき性質のものであるとさえ、いえるだろう。

#### 4

焦点を中学校にしほって考えると、今日の中学校は小学校教育の基礎に立つ大衆のための教育機関であるという認識は、将来も堅持されるべきであり、これをいささかでも改めるといふことは、たとえそれが教育の能率化のために役だつ措置であるとしても、絶対に避けるべきである。したがって、いかなる刷新改善もこの原則をふみにじるものであるならば、それは「角をためて牛を殺す」結果となる。中学校教育をよりいっそう確固たるものにするためには、今後いろいろな面で改善を必要としようが、この点だけははっきりわきまえておく必要がある。

この意味で、昭和三十一年度の教育課程審議会が中間的な一応の

了解事項として、中学校における「職業的陶冶」について、つぎのように報告したことは、上記の基本精神を的確にふまえている点で注目すべきである。

(一) 中学校は中等普通教育をおこなうという基本的立場に立ち、一般教養としての職業的陶冶を重視する。

(二) 進路に応ずる職業的陶冶を強化するため、進学者・非進学者の別によって教育課程をはっきりと区別したり、あるいは学校制度の変革をもたらしたりするような方法を探ることは考えない。

(三) 職業・家庭科の教育の効果が上がるよう、その名称、内容の編成などについて今後研究する。

したがって、今後の職業・家庭科を構想するばあいでも、この教科の動向が中学校の性格を正しく伸ばすことにも、またそれを大きくゆがめることにもつながっているので、科学技術教育振興の正しい基本路線に沿って進めるという態度の確認こそ、最も肝要なことがらである。

とくに中学校における科学技術教育の主たるねらいは、国民全体の科学的知識と技術的水準を高めるために、近代産業技術の基本となるべき基礎科学を完全に理解させ、科学を通して人間性を豊かにし、社会人としての広い教養を習得させることにあるのであるからいわゆる実用的な職業教育のそれと同日に論ずるわけにはいかなない。この点をはっきりさせた上で、今後、職業・家庭科が科学技術教育という広い視野から改造されるとすれば、どんな目標のもとにいかなる課題を解決していかねばならないかについて、いささか究明を試みてみよう。

#### 5



さる一月末に文部省では、都道府県教育委員会の指導事務主管部  
課長会議を開催して、指導行政の諸問題とともに小・中学校の教育  
課程改善策の資料にする目的で、現行の教育課程の問題点について  
研究協議をおこなった。そのなかで、職業・家庭科に関してあげら  
れたおもな問題点を掲げてみると、つぎのようである。

(一)名称を改めて一本にせよ。小・中・高に連絡のある適当な名称  
が必要である。

(二)領域は質的にせよ。内容構成も構造的・立体的に、基本分  
野・生産技術を中心に編成すべきである。

(三)共通必修としての立場から整理してせよ。領域を細分化す  
れば、職業技術教育になる。

(四)理科・図工との関連で整理・精選せよ。

(五)教員養成と施設・設備の強化が必要である。

(六)選択の職業・家庭科については内容を明示せよ。

以上の指摘は別に新しい問題ではなく、この教科に関してはどこ  
でも提出されることがらである。しかるに、毎回同じことが主張  
されて、論議がいつもどうどうめぐりするの、いったいどうした  
原因によるのだろうか。

卒直にいつて、これは農・工・商・水産・家庭・職業指導の六領  
域のバランスの上に成立しているこの教科の命運である、と断ぜざ  
るを得ない。この六領域の存在を認めた上での目標論・内容論・方  
法論など、いっさいの議論は全くあまいなものならざるをえな  
い。したがって、職業・家庭科の過去十年間の経験に徹し  
ていくの面で改善がなされた改訂学習指導要領も、多くの問題をは  
らんでおり、それに対していくたの貴重な批判が寄せられているわ

けである。逆説的にいえば、この改訂学習指導要領は、上記のよう  
なわく内における最上の「傑作」といえるかも知れない。

こうしたこの教科のよどみを打破し、真にユニークな存在として  
脱皮させるためには、上記のような原則を御破算にし、科学技術教  
育の立場から再構成する必要がある。ここでは、単に一教科のわく  
内の改訂にとどまるのではなく、中学校全体の教科の再編成が要求  
されるであろう。こうした教科の統廃合や新設こそ、このたびの教  
育課程改善の主要な任務となるべきである。

## 6

そうした中学校の内容面の改造をおこなう場合、この教科はいか  
なる目標の達成をめざすべきであるか、これをはっきりおさえるこ  
とが先決問題である。そこから内容も方法も編みだされてくる。そ  
うして、その観点から、従来この教科に内包されていた多方面にわ  
たる内容に検討が加えられ、あるものは他教科に分属され、またあ  
るものは小学校や高等学校の内容にゆだねられ、さらにあるものは  
捨てられて、すっきりしたものに整理されるだろう。

わたくしはここに、この教科の今後の目標を、つぎの四つの観点  
からおさえようと思う。

1 社会的必要をみたくす。現在、わが国の産業経済は世界  
的な技術革新の時代を迎えて、技術水準の向上による生産性の増大  
を最大の課題としている。このためには、優秀な技術者を多量に養  
成することが緊急必要であるが、それと同時に、一国の技術的水準  
の高まりは国民全体の技術的教養の高まりなしには果しえないとい  
う事実にかんがみ、普通教育のなかにもこの面の教養を与える領域  
を相当大きな重みをもって織りこむ必要がある。このことは、従来

この教科がとかくせまい地域社会や、おくれた産業の現実の要求に追従しがちであった立場とは全く異なっている。

2 社会経済的なセンスを体得させ、公正な判断力を育成する（社会科学の学習を具体化する）。現代における科学技術の飛躍的な発展は、産業経済・労働事情・社会生活などの各方面にわたって、

いちじるしい変化と問題をよび起しつづつある。これらの困難な問題——たとえば生産性向上運動、企業のオートメーション化などを、望ましい方向に解決するためには、ひとえに国民的協力に待つところが多い。したがって義務教育の段階で、こうした問題に対する関心と公正な判断力を、具体的な事実を通して啓培することがきわめて重要である。この教科では、単に技術を技術として学習させるのではなく、それとの関連においてこうした面の教養を与えるのである。

3 合理的・実証的な精神を陶冶する（理科の学習を具体化する）。由来、日本人は観念的・情緒的な国民であり、こうした国民的基盤が今日の人文科学・芸術面の文化の発達に寄与してきたのであるが、他方、こうした国民性が科学技術の発達を阻害している大きな要因であるともいわれている。新しい発明・発見が創意的に生みだされ、一国の科学技術の水準がいちじるしく向上していくためには、そのささえとなつてゐる国民が合理的、実証的な性格を具備することが必要である。近代の技術はつねに科学的基礎の上に成立しているから、理科の学習は技術教育の基礎となるが、そのねらいとするところは、普遍的な自然科学的法則性の理解（具体——抽象）にあるので、その自然科学的法則性を生産に適用する（抽象——具体）ことをねらいとするこの教科の学習はきわめて重要であ

る。この両者の学習が一体となつてはじめて、上記のような望ましい国民性を育てることが可能になる。したがつてこのことは、かつて強調されたような勤労主義や愛汗主義の立場とはあいられない。

4 生活の科学化と経済生活の合理化に役だてる。家庭生活を合理化するために、最近では各種の機械器具が導入されつつあるが、これらを正しく活用するには、単なる操作技術だけでなく、その背景となつてゐる科学的知識と技術学的な背景を理解することが必要である。とくに工業製品の生産ならびに消費に関する理解を深め、それを正しく評価する能力を体得することによって、消費者の要求を生産者に反映させ、製品の品質向上を促進することにもなる。この教科の内容は、ある意味ではほとんど生活技術の域を出るものではないが、それはせまい範囲の、しかも無系統な生活技術ではなく、生産技術にうら打ちされたものである。したがつて、これは従来この教科で主張されたような、役にたつ生活技術の立場とは次元を異にしている。

#### △あとがき▽

以上では、まだ主題をじゅうぶんに究明しつくしてはいないが、今後大いに脚光をあびるであろうこの問題について、ごく大づかみのすじ道を明らかにしてみたのである。今後こうした方向にわれわれの集団的思考を集中し、みどり豊かな成果がえられるよう、読者の御批判と御叱正を期待したい。

（国学院大学講師）

# 中学校に一般教育としての 技術教育はなぜ必要か

本 山 政 雄

本年度から実施された改訂中学校職業・家庭科の指導要領についてはわれわれも幾多の感想をもち、本誌上でも種々批判されてきたのであるが、この指導要領が従来の指導要領に比較して特にすぐれている点は、「職業・家庭科の教育は、将来いかなる進路をとる者にとっても必要な一般教養を興えるものである」と規定したことである。即ち従来、ともすれば、将来高等学校・大学に進学する者、将来指導者になる人人には無用なもので、中学校卒業後直ちに実務につく者にだけ必要な職業準備の教育と考えられていた。それが今回の改正で、上級学校に進学するとせぬにかかわらず、男女をとわず、すべての中学生が国語や数学などと同じく、かならず学ばなければならぬ教科として職業・家庭科を位置づけたのである。

われわれが、職業教育・技術教育を一般教

育として位置づけたことをなぜ高く評価するか理由は後にのべるが、最近このような技術教育の位置づけを修正しようとする動きがあることは注目しなければならぬ。この動きというのはまだはっきりした形にはなっていないが、たとえば中央教育審議会（以下中教審という）での「科学技術教育」の審議の経過をみると、中学校の技術教育を再び職業準備教育として位置づけようとする動きが濃厚になってきた。

この中教審というのは周知のことと思うが昨年末、日本経営者団体連絡協議会（以下日経連という）から「新時代の要請に対応する技術教育に関する意見」がで、つづいて大阪からも同様の発表があり、本年四月二十七日には灘尾文部大臣から中教審にたいして「科学技術教育に一貫性を持たせるためには、学校制度にどのような改善が必要か」「中学校卒業後、直ちに産業現場で働く青少年の技術

能力を高めるためにはどう対処するか」等の数項目の諮問があるなど、科学技術教育の振興が経済界、教育界の大きな問題になっているが、さきの技術教育偏向の問題は、この文部大臣の諮問に答える中教審の審議過程における問題である。今日科学技術教育が特に問題になっているのはわが国だけの特殊の問題でなく、全世界の問題であって、その理由は申すまでもなく、原子力産業、電子工業というような産業技術革命の進展につれて、各国の技術水準が世界の大勢に立おくれることを心配してであり、イギリスにおいても昨年二月、技術白書を出し、科学技術教育の振興に努めている。

世界のこうしたすうせいの中で、わが国の立ちおくれた技術教育を改善・充実しなければならぬことは当然のことであるが、ただここで問題になるのは、その改善の方向と方法がどうであるかということである。たとえばいまのべた英国の白書を見ると、科学技術教育の振興といっても目の先の技術教育を充実すると言うのではなく「すべての技術教育が能率よくできるためには、目ざす分野に目標をしばって明確にそれに向っての学習を体系づけることはいくらまでもないが、生産設備が自

働機械化の方向へ進むにしたがつて、人間のする仕事もこれが代つてするようになれば、そこにおける技術工のする仕事は、その管理と指令と保全とが主なるものになつて来る。そこで要求される能力は、正確な判断と論理に基づく結論と行動の能力である。その判断はあくまで科学的数理的なものでなければならぬ。そうなつてくると、数学や物理・化学等の基礎学力がますます重要になる。そして幅の広い適応性を持つた技術教育が行われなければならない」と技術教育の振興を広い見地にたつて考えている。

英国や米国の技術教育にたいする考え方は伝統的にこの白書にあるように広い立場にたつているが、これと正反対の立場にたつのがわが国の経営者たちの技術教育論である。わが国の当局者、経営者が技術教育の振興というとき常にとる立場は、すぐに役にたつ、地方の実情に即するというようなことで、さきの英国の白書のような広い視野にたつたり、技術教育の基礎を充実するというような、おそれから気持をもつことができない。さらにこのことと深い関係があると思うが、わが国の行政当局、経営者に共通にみられる技術教育観は、技術の教育は、中学校卒業後、ある

いは高等学校卒業後直ちに就職する者にのみ必要な教育で、将来指導的立場にたつ大学進学者にそれ程必要ない教科であるとの考え方である。

この考え方は、大学進学者の望ましい民主的な人間形成にとつて、技術教育ということではそれ程重要な教育ではなく、高等学校だけで直ちに就職する者に重要な教育だとの考えが強い。このことは他の表現を用いると、技術教育というのは、大学卒業者に使われるような人びと(就職組)の人間形成には重要な役割をはたすかもしれないが、労働者を使用する側の人びとの人間形成にはそれ程の重要性がないということである。技術教育にたいするこうした考え方はその上、技術教育を主とする学校(下級労働者になる人の教育)と技術を中心としない学校(いきおい進学者の学校となる)の二つの系統の学校があつてもよいのではないかという結論にも導く。このことは現に日経連の人びとが短大と高等学校を一本にした専修大学、中学校と高等学校を一つにした実業高等学校を考えていることからでも明らかである。

わが国の経営者や行政当局者の技術教育にたいする考えのせまき、偏見ということはい

まの説明で明らかであるが、それならば、正しい技術教育の考え方はどうあるべきであらうか。つきにこの点を一般教養との関係において考えてみる。

## 二

過去の教育において一般教養と考えられていたものは、言語・芸術・文学といったような人文的な教養で、豊かな人間性を育成するには、こうした人文的教養を身につけさせることが重要と考えられた。したがつて、このばあいには技術の教育ということは、さきの経営者たちの考えと同じく、すべての人間の教育に欠くべからざる教養とは考えられなかつた。しかし、こうした教養観は人類の歴史を考えてみるとおかしなことである。申すまでもないが、人間が動物より進化し、自然の支配から自由になり、逆に自然を支配するようになったのは、われわれが言語を用い、技術を駆使する労働の結果である。労働こそ人間を人間たらしめ、人類の文化を進めるものである。即ち人類が進化し、自由になつたのは、精神的思考と肉体的労働とがあいまつてはじめて可能であつた。したがつて精神と身体を一体化するということが人類を進歩させる基本的条件であつた。

ところが、人類の歴史をみると、元来平等であるべき人間の中に、支配する者と支配される者、主人と奴隷のいる階級的な社会ができ、支配する者は奴隷の労働によつて生活し、みずからは労働をする必要がなくなった。こうした階級の人びとにとつては、支配者自身の成長はもとより、自己の子弟の教育にも重要なことは、言語・文学・哲学・芸術というよ

うな人文的教養であり、技術の教養などは必要がなかつた。これにたいし、支配される側にある者に特に重要な教養は、毎日の労働に必要な技術の教養であり、哲学・文学のような教養は、はげしい労働条件のもとでは意欲があつても無理であるし、支配者はこうした教養は被支配者には害であると考へた。

階級社会における教育や教養の歴史をこのように考へてくると、支配者の教養というのは精神的な即ち頭だけの教養であり、被支配者の教養は手だけの教養で、いずれも一面的な教養であつた。即ち階級的な社会の教養は精神と身体が分裂し、これら二つを一体とした教養となつていなかつた。人間の過去の歴史から考へてみても、民主的な社会の理想からも、教養の本来のあり方からしても、本当の教養は精神と肉体、手と頭の分離しない両

者がこんぜん一体となつた教養でなければならぬ。

過去の教育における教養についてのあやまりは、以上のような歴史的な背景をもつていゝるが、中学校が、もしも民主的な社会の形成者としての全面的に発達した人格育成を目標とする普通教育の機関であるとすれば、そこで教える教科は精神的教養だけに偏つてはいけなはずであり、さきにも述べた、頭と手の分離しない教育を考へなければならぬ。こう考へてくれば、技術の教育が人文的な教養と並行して中学校の一般教育科目の重要なものであることがわかるし、その教育内容が、ただなにかの手先の技術を習得すればよいというのでなく、近代産業の基礎的な技能か技術的知識、技術の社会的経済的背景の知識が含まれていなければならぬ。

われわれが、今回の指導要領が技術教育を一般教養として位置づけたことを高く評価したのは以上のような民主的教養観にたつていゝるからである。最近の技術教育論議が、技術教育振興に名をかり、上級学校進学者には技術教育をはぶき、就職者にはすぐ役にたつ技能を、技術の社会的経済的背景の知識を与えずに教へこもうとするのは、われわれの念

願する民主教育を破かいし、さきにも述べたう者の教育と使われる者の教育を復活することになる。もしもわれわれが民主主義教育を確信するならば、中学校における技術教育は指導要領にあるように、男女・進学・不進学を問わず、すべての生徒に必要な教科であることを疑わないであらう。

今日経営者や行政当局の一部に、技術教育を中学校における一般教育と考へず、職業準備の教育として位置づける動きがあるが、このことは、中学校の教育を、使う者の教育と使われる者の教育とに分断することになり、ひいては日本の教育を戦前の教育のような非民主的な教育に逆行させる恐れがある。われわれはこの際、精神と肉体、手と頭の分離しない全面的に発達した民主的な人間を育成するために、中学校における技術教育は一般教育であるということを、改めて再確認しようではないか。(名古屋大学助教授)

教育 臨時増刊 教科の研究特集号  
職業 業……………五十嵐 頭  
家庭……………羽仁 説子  
発売中 発行・国土社  
一二〇円

# 小学校の産業教育を

どうつかむか

大田卓

▲ねらい▼

小学校において産業というものを前面に出し、そのための技術教育というと、産業社会の道具的人間を幼少時から準備するのかと誤解される。わたしどもは、そのような道具的人間をではなく、生産社会の主体になる人間をつくりあげようとしている。この社会の課題にむすびついて、産業社会を主体的にもりあげていく人間の形成をめざして産業教育、生産教育の線を出したい。

したがって、小学校、中学校の産業教育を、一貫して普通教育としておさえ、その全体系を将来の産業社会にむすびつけ、基礎的教育ができるように組織するようにねらいたい。とくに小学校において、普通教育の基礎的陶冶としての性格をしつかりとつかんで、全体系の教科内容の編成、教育計画を一貫的に構成していかねばならない。

▲内容をどうおさえるか▼

教育内容を体系的、一貫的に積みあげていく、視点をつくるのだが、そのためには、まず戦後、新教育の線ででてきたカリキュラム構成のねらいを分析検討して、この問題の構成の基本的あし場をつくつていきたい。

生活経験主義カリキュラムの構成のねらいは、いうまでもなく、被教育者(こども)の生活経験を重んじ、こどもの生活の場である地域社会の環境条件にそって内容を構成するところにある。過去において、恣意的、権威的に上から画一化された教育内容の構成の事情からみれば、具体的、現実的な問題の構成ができることの進歩性のみとめたい。しかしこの地域環境的条件の再構成について、現在基本的にはつきりとしたメドをもたなければならぬ。

## 1 地域生活主義へのかまえ

○卑近な地域主義におちいらないように限られた地域社会の条件のなかで教育内容

をえらぼうとするので、かたよつた学習内容になりがちである。たとえば、消費的な都会地では、流通過程、消費部門の教材が大部分をしめ、生産に関する教材がおざりにされるようにみうけられる。また地域社会の要求というものを前面にだし、それと直線のにむすびつくことをよしとするむきがある。そのような直線的なむすびつきでは、この国のような停滞した地域社会の条件によって、教育はゆがんだものにされてしまう。とくに生産的視点に立って、この条件をみつめるとき、停滞的な人間と社会のしくみと、生産技術のしくみを基本的に改善していかねばならないことにぶちあたるのである。現場の学校の教育内容が、地域社会とのつながりにおいて考えられねばならないことはもちろんであるがしかしこの社会は、ゆがみとひずみをもつている。したがって近代社会の進歩した生産社会の発展の角度からいって、この社会の要求が教育的価値があるといえないばかりが多い。むしろこのような地域社会の要求を、そのゆがんだしくみと連関して分析し、再編成していくしつかりとしたメドとテダテをもたなければならぬ。ここにこれをくみわたす。おす産業教育の視点をみいだす。

## ○ 子どもの生活経験と系統学習

こどもの生活経験は、せまい地域社会に限られている。したがって前に述べたような地域主義が、こどもの生活経験尊重という名のもとに合理化されるのである。ここからまたこどもたちの身のまわりの生活事実への個別的な関心、その成長にそつて教育内容がえらばれることが多いので、客観的な知識や技術がかたよつてとりいれられるようになる。それも生活に現象的機能的にむすびついてとりあげられるため知識や技術の体系がバラバラにもちこまれることとなる。

また系統学習によらなければ学習効果があがらない言語や知識や技術も当然でてくるのであるが、その点の阻害はとくに学力低下というすがたで欠陥をばくろししてくる。

## 2 社会に対する身がまえをたしかに

教育内容は、社会生活とのつながりにおいてとらえるべきことはいうまでもないが、その社会生活をどのようにとらえ、その社会生活のなかから自主的に積極的にどのように生きていくかという身がまえを産業社会の知識・技術の習得をとおしてたしかかなものにしていかなければならない。

その点、現在の教科書にあらわれている教

科内容の性格をさぐつてみると、納得できない問題にぶつかる。

## ○ 社会生活課題を体系的・構造的に

小学校高学年の社会科「工業の発達と生活の進歩」という生産に関する単元の模範的な構成がある学校についてみて次のような批判がなされている。工業の発達と生活の進歩という中心課題が、その社会の生産課題とこども達の生活事実とをむすびつけて体系的にかまえていない。

米のうつりかわりの絵巻、石炭、石油の問題、発電、電気の利用という教材の内容が、ただ物の生産をいい、技術の進歩をおしえるにとどまり、断片的な知識となつて、この社会の生活、生産の課題をとくための基本的身がまえをとおした体系的な問題のはあくといふものはでてこない。(国立教育研究所「全国小中学校教育課程実態調査」二次報告四分冊五〇—五一頁)

これはむりからぬことでもある。つまりこの内容構成の基本に教科書があり指導要領がある。それがそのような課題意識につらぬかれないためたともいえるのである。

## ○ 事実をまともにつめる力を

またここにもられる教材の表現をみると、

現在の社会生活を美しくし、その社会に適合していくような態度や心情をつくらせようとするかにも感ぜられる。

炭鉱をとりあげた教材でも危険状態などほとんど感ぜられないように述べられ、工場生産の事情も近代化されてすばらしいものであるとされる。地方農村のこどもたちは、そのような理想的条件にある近代産業の職場へ、そのようななささえのある都市生活へとあこがれをもち、きびしいくるしさをもち農村の生活がいやにもなろう。

ところで、同じ叙述で家庭生活のありさまが述べられる。あかるい電灯のもとに一家団楽している光景であるが、毎日そのような団楽がつづけられる家庭がどのくらいあるであろうか。あくせくと働きとおさねばならない多くの家庭のなかでは、このような事情はなかなか実現できない。こどもたちは自分の家庭とかけはなれた生活をしらされてとまどいすることであろう。「家庭生活はそのようであるべきはずなのに、はてさてオレの家の生活は、となり近所の生活は」と考えこむこどももいるだろう。

炭鉱地帯のこども、工場労働者の多くいる都会地域のこどもたちはそれぞれにこの生産



の場がどんなものであるかも知れな  
ききして  
る。

教科書にえがかれた美しい条件と  
實際経験  
している事実とにギャップを感じる  
気が、  
今のボクたちの現実がなぜ美しい  
理想のよう  
にならないのかというせんさくの  
気持ちにもな  
つてこよう。しかしこのせんさくの  
気持は、  
まともにとりあげられ伸ばされ  
ない。

こどものせんさくの眼は、美しい  
理想をみ  
るよりは、現実のきびしさ、くるし  
さ、みに  
くさなみつけようとする。まず身  
近かにある  
生活の事実からみつけ、なぜ、理  
想のよう  
にならないかと、生活の意欲をも  
つてたずね  
るのである。しかし教科書はそれ  
を求めていな  
い。社会生活の事実として客観  
的にみ  
つめる立場をも肯定してはいない。

事実を事実としてみつけると、こ  
の社会の  
現実のくいちがいが、それから生  
ずる社会悪  
などがみつけ出されるのであるが、  
それに美し  
いペールをかぶせ、矛盾からきり  
はなしてこ  
そこどもたちは健全な発達ができ  
るとしてい  
る。ペールをかぶせられた社会の  
認識をその  
ままにみとめていつて健全な成  
長がとげられ  
たというこどもたちは、現状を肯  
定し、積極  
的に生活をみつけ、おしすすめ  
ようとする意

欲をもたない人間になるようである。

ここにわたしたどもは、事実を  
事実として客  
観的に確実にみつける態度をつ  
くつていくべ  
きことを痛感する。したがつて  
その視点にた  
つて教育内容の組織化を考  
えていかなければ  
ならない。

○ 科学的合理的なスジを生かすこと

このように事実を事実として客  
観的にとら  
え、組織構成していくなかに科  
学的なものをつかむ力が養われ  
ていくべきことがもとめられる。  
事実をきびしくみつけて、そこ  
に人間の生活の意欲から、矛盾  
をみだし、問題解決の姿勢を  
とつていくなかで科学する力が  
やしなわれていく。事実をきび  
しくみつけようとする教科内容の  
構成は、その背後に科学的視野  
と知識を用意していかなければ  
ならないのである。

ところで科学的知識、更にそれ  
をたしかにする技術を強調しな  
ければならないのであるが、こ  
の科学知識・技術が、社会生活  
の事実をまつすぐにみつける立  
場とつながっていない場合、そ  
の知識・技術だけを断片的にも  
つた人間は、結局のところそ  
の知識技術をすて去り、現状  
の社会生活にまらぬこまれば、  
生産の技術、生活の技術は、「  
カン」と「  
コツ」

に頼つていくようになってしま  
うのである。

ある農村の青年は、中学卒業  
にあつて、この農村生活で、生  
産能率をあげ、生活を合理化  
していくためには、科学的知識  
と技術がいかに重要であるか  
を自覚した。卒業後、4Hクラ  
ブをおし、多収獲をあげるた  
めの施肥の方法を科学的にま  
なんだ。早速おやじにはなし、  
所有の田を利用して実験しよう  
とした。おやじは実験などとは  
とんでもない、それが絶対に  
多収獲をもたらす採算がすば  
らしくよくなるならばやつても  
いい、そうでなく実験に失敗  
しようものならば、この貧しい  
生活は、とりかえしのつかない  
重大な問題にぶつかる、な  
かなか承知しなかつた。

しかしそれを無理におしてや  
つてみたが、結局失敗におわ  
つてしまつた。施肥すべき田  
圃は、はつきりと表示される  
ものではなかつた。一反歩に  
何グラムという規準を知つて  
いただけでは、このあいまい  
な田圃に適合した量の肥料は  
あたえられなかつたのだ。

客観的にはかられた肥料が効  
をそうさない田圃、その田圃  
はまがりくねつた畔にくざら  
れて、はつきりとした面積が  
算出できないためであつた。  
しかしこの田圃をはつきりし  
た面積の表示できるものにする  
ためには、こ



の家に、この村におおいかぶさつてゐる。複雑な生活のしくみ、人間関係と対決していかなければならぬ。耕地整理もできない複雑につきかさねられた村落生活のいきさつがごつんと問題になるのだ。

このようないきさつのいくつかのけいけん——つまり日本の農村がもつ現実のしくみから反ばつてうけて、この青年の科学的意欲はひとたまりもなく崩されて、その知識と技術は「カン」と「コツ」の世界にひきづりこまれていつた。

また同じような農村でも、たしかに原動機や脱穀調整機や畜産などの新知識、新技術をとりにいれようとするとところもある。そして学校教育に、新知識・新技術を期待するのである。しかしその農業経営のくみあわせをみると、この新知識、新技術は、この全経営のうちのある限られた部分にだけ適用されるのであつて、その生産過程全体をゆりうごかすものではない。生産過程の本質そのものは、手工業的経営的技術（米づくり、麦づくりのカンとコツ）につらぬかれていて、それからはずれた局面、側面に、科学的技術のよそおいをもつた原動機の運転のしかた、農業配合のしかた、肥料のつくり方が経けんの技能に

妥協したかたちでとりいれられ、科学知識技術は、限られた効用しかみとめられない。ここでは近代科学技術は、本性を失う。更にはそのニセ科学技術の部分こそ農業の科学化などという一見、良心的な名目のもとに、肥料会社や農業機械の会社が、農民から利潤をまきあげる部門にもなつてゐる。

近代的な科学知識技術は、現在の農村の社会関係をとおし、生産の過程にはいつていくと、多くの場合、このようにいびつなかたちになつてしまふのである。

では、これをいびつにする農村の社会関係、生産のしくみが改良されないかぎり、科学知識技術はまともはこの社会にはいることはできない、とあきらめるべきであらうか。

しかし、科学的な知識技術をこの問題解決のために一貫してとおしていくならば、そこに問題解決のための大きな力がわいてくる。

つまり、近代科学技術をまともになげこまれる力を若い世代につけ、それがうけいれられない社会地盤の矛盾をみつめられる社会科学の力が身につくようにしていくならば、問題解決の姿勢が、おのずからつくられてくるのである。わたしどもは、学校教育をおえて巣立つたこの青年達の苦悩のさまをまともに

みつめて、教育内容、指導の欠陥を義務教育全般をつらぬいて考えていかねばならないことをここにおしえられる。

つまり、小学校の段階より、基礎陶冶の条件として自然と社会の法則を基礎から一貫して身につけさせるように教育していくべきことを痛感させられるのである。そして、そのような視点であたえられる知識技術が、日本農村という屈折を強いる社会関係の干渉をしりぞけて、まっすぐに子どもにうけとられるようにするその方法を追求していかなければならない。

都会の生活条件においても同じことが考えられる。せまい消費的視点に立つのではなく、この社会全体の生産条件をみわたし、とくにその基礎知識の構成をたしかに生産的なものにしていかねばならない。とくに生産労働と技術の評価を、ひろく全階級的なものにしていかねばならないのである。

3 国民的教育課題の自覚を 農村社会はもとより、都市社会においても、この国には近代的産業の様式からいつて、ゆがんだしくみがさまざまあり、それが社会関係とからんでさまざまな問題をあらわにしている。

その問題は、農村、都市という地域的生産

条件の解決だけではとげられない。全国民的

な社会の生産様式の課題としてつかまれない。農村社会の低生産性、過剰労働力——都市中小企業の前近代性は一連のものであり、そこに国民の貧困がうごめいている。全国民の大部分をしめる勤労者大衆は、このようななかであくせくと低迷している。

勤労する国民の努力が、そのままに国民の生活のなかにかえつて、生活をゆたかにしていくくみがかえられねばならない。

つまり勤労する国民の生活を基盤として、平和と独立が確保できるような産業の態勢を

夏の研究集会にそなえて

ねがうのである。

その平和と独立の産業の態勢をおしすすめるためには、近代的な生産の様式が、全国民的な規模で考えられなければならないし、それに有効な役わりを果たす科学知識技術が、全国民のものになつていかなければならない。そのような課題の自覚のなかに、国民大衆の教育である義務教育を基礎的に生産教育としてたかめていかねばならないことを確認したい。

4 すべてのこどもが習得すべきミニマム センシャルズを

## 連盟提案のあらまし

### 第一群の学びかたへ都市のばあい

#### 第一群研究部会

都市の中学校における第一群の学習は施設・設備の面で、またその学習効果の面で、し

ばしば問題となり、たいへん取扱いにくいものとされることが多い。

全国民的な生産社会の課題にこたえるその基礎教育は、せまいものでないことはわからう。とくに小学校においては、全産業生活の基礎的陶冶の条件をひろくしつかりとおさえないければならない。

つまり産業社会は農業、工業、商業とそれぞれ機能を別にしそれぞれ異質の知識技術が適用される（モノテクニズム）とはかんがえない。農業、工業、商業をつらぬく近代的な知識技術の体系を総合的に考え、それに応ずる基礎的な教育内容の構成を効果的にしていかなければならないのである。（国学院大学助教授）

学習指導要領には、職業家庭科の学習目標がりっぱにのべられており、その目標到達のためには、都市においても、第一群の学習をおこなうべきことがとかれていた。にもかかわらず、都市における第一群の学習は、いろいろと問題点が多い。施設が不十分でも、自信をもつて学習がおこなわれるために、都市における第一群の教育の目標と教育内容につ

いて、改めて考えてみよう。

一、都市における第一群の学習のねらい  
都市の生徒は、その殆んどが将来農業に従事しないし、現在の生活も農業生産とは縁の遠いものである。このような生徒にたいして、「なぜ第一群の学習が必要なのか」「土けら一つない学校で第一群の学習が可能であろうか」などの疑問をもつ教師も多いことであろう。しかし中学校における職業教育が職業準備教育でなく、技術の実践を通じて、産業を理解することを目標としていることを考えるならば、一応この疑問は解かれるのであるが、都市における第一群の学習では、どのような技術を通じて、農業をどのように理解させるべきかという点を、改めて確認する必要がある。まずそのねらいとしては、

(一) 農業生産における基本的な技術の習得  
よつて農業生産の性格を理解させる。  
農業生産においてその根幹をなしている欠くことのできない基本的な技術を習得することによつて、農業技術や農業生産の性格について理解させることを第一のねらいとすべきであろう。農業生産は自然環境要素の支配をうけることが多い。この自然環境要素の支配をなるべく

すくなくし、これを克服してゆくものが農業技術である。農業技術が進めば進むほど、農業生産が自然環境要素からの支配をうけることがすくなくなる。このようなことを観念的でなく、技術実践を通じて具体的に把握し、農業生産や農業技術の性格を理解させる。

(二) 二作物の栽培過程を通じて農業生産の性格を理解させる。

作物の栽培は個々の技術のみでなく、それらの技術が総合されたものであり、しかも全生産過程において一つの技術が他の技術に大きな影響を与えるものである。

播種——管理——収穫の全生産過程の実践を通じて、具体的に農業生産の本質的な性格を理解させる。つまり農業生産はその生産過程の「一コマ」「一コマ」の適否が生産に大きな影響を与えるものであること、しかもその「一コマ」の失敗は結局とりもどすことができないものであることを、実際の栽培を通じて理解させる。

(三) 科学的原理や法則を実際の作物の栽培に適用する方法を習得させる。(技術的

教養として)。

栽培の基礎である植物生理現象を理解し、個々の技術をその立場から理解し適用して、栽培の実践を通じて科学的法則性を把握させ、農業生産の科学化の必要を理解させる。

(四) 農業労働の性格を理解させる。

農業生産が自然環境要素の支配をうける限り、農業労働とその支配をうけることを理解し、農業労働を調整することの必要やその方法について、栽培実践を通じて具体的に理解させる。このような時に農業の機械化の問題の契機が得られる。農業生産の社会的経済的意義を理解させる。

栽培実践を通じ、農産物を生産することによつて、その生産の意義、生産物の価値や農作物の商品化などについて理解させるとともに、技術の進歩が生産を向上させ、生産の合理化が生産の向上・農業労働の改善に役だつことを実践的に理解させる。

(五) 「わが国の農業の」課題を理解させる。  
(一)〜(四)までの学習目標の総括として、技術の実践、生産の実践を通じて、わが

国農業の課題に目を向けさせ、その解決の方法に迫つてゆく。

以上のように、都市における第一群の学習は、農業技術そのものを身につけることを第一義とするのではなく（じょうずに作物を作ることを目標とするのではなく）、農業生産の性格や特長を実践的に理解させることおよび技術的な教養の一つとして、技術的な物の見方、考え方技術的資質（緻密性・実践性・合理性など）を養うことを第一義としておこなわれるべきであろう。

## 二、都市における第一群の教育内容

教育内容としての技術を、従来のような作物中心の考え方でなく、栽培や飼育の全過程を分解し、その一段階、その「一コマ」「一コマ」を一つの技術としてとらえることが必要である。たとえば「花の作り方」でなく、草花の栽培過程における播種・移植・施肥などという一段階こそが技術なのである。このような作業分析によつて、技術を抽出し、農業生産過程において、欠くことのできない技術を基本的技術としてとらえこれを最低必要な技術の教育内容とすべきであろう。これに基本的技術の裏づけとなる技術的知識・農業生産・農業労働の背景となる社会的経済的知

識を加え、最低必要な教育内容とすべきであろう。

従来のように「野菜が作れないから草花でも」とか、「環境美化や情操教育をかねて草花でも作る」といったような考え方でなく、目標を確立し、その立場において、教育内容をきめ、その教育内容をみためために適当な素材（作物）を選んで、自信のある学習をなすべきであろう。

## 三、都市における第一群の学習指導

前述のように目標を確立し、教育内容をきめ、学習の素材（教材）を選定し、いよいよ学習指導をおこなうばあい、圃場の問題でゆきなやむことも多いであろう。校庭の一部、校舎の前（南側）などに圃場を設けられる学校は、その面積が狭く（生徒数にたいして）とも、学習期間をかえるとか、学習グループの編成に考慮を加えるとかの工夫によつて解

# 調理教材内容の選定

教材の検討と整理

家庭科研究部会

一なぜ教材内容を検討するか  
私たち家庭科教師は、学習指導要領に示さ

れている盛沢山な教育内容を、生徒や父母の要求も加えてどうすれば限られた時間内にお

決できることも多いが、校舎・校庭ともにコンクリートで土塊一つえられぬような都心の学校では、屋上にコンクリートで花壇を設ける（都心の学校やデパートにはこのような花壇も多い）とか、鉢植栽培をおこなうとかの方法も用いられよう。たとえ鉢植栽培でも、基本的な技術の習得や栽培実践は可能であろうし、前述したような第一群の目標は達成されるであろう。また達成しえるような学習指導計画をたてる努力はすべきであろう。

以上のような学習計画をたてても、なお不十分な点はスライドとか映画、見学などの補助的手段で補うことも必要であろう。しかし都市であるがゆえに最初から実践（技術実践）的学習を放てきして、もつぱら教科書やスライドのみによる学習をおこなうことは、技術教科としての職業・家庭科の学習とはいえないのではなからうか。（中村邦男）

いて最も本来の目的にそうように指導できるかということに心をくだいている。特に調理の指導についていうならば、老大ともいえる複雑多岐な内容をしほりしほつて、技術的にも、生徒の発達段階の点からも最低の基本量を見出すことはできないのだからか。中学校は日本国民のうける義務教育であるし、高校においても女子必修であることを思うとき、そこで指導される内容は教師の単なる経験や常識からこれだけ必要だろうという程度のものであつてよいはずは決してないのであつて、家庭生活の眞の合理化・民主化のためにも調理を基本的に体系づけ、そこから基本線を見しようと考えたわけである。

## 二 調理教材の選定の視点をどこにおくか

既成の調理の内容を検討すると、(一)料理別(日本・西洋・中華等)(二)材料別(魚介・肉・野菜等)(三)方法別(煮方・焼方等)(四)調味料別(塩・味噌・砂糖等)となつていて実際にはその組合せが非常に複雑になるし、さらに調理にともなう栄養価の増減も重要な要素になる。それで私たちは、この広範囲なものの中から教材として選定するばあいの視点をつぎのように考えてみることにした。

(一) 栄養学的視点  
(二) 調理手法的視点  
(三) 社会科学的視点

教材としては、この各視点から問題点にふれるようなものであることが望ましいわけである。

### 三 各調理法の検討

現在調理はその手法によつて、御飯物・麵類・汁物・煮物・焼物・揚物・蒸物・和え物・寄せ物・炒め物等と分類されているが、私たちの求める基本線をきめるために前項の三視点から検討することにし、その最初のものとして煮物をとりあげた。

#### (一) 煮物

- 1 「煮ること」の定義  
加熱調理の一種で水と熱が媒体となる
- 2 「煮ること」による食品の成分の変化と意味(表②参照)
- 3 「煮る方法」の分類(表③参照)  
註 煮物は、味附が容易で調味料の味が充分しみこませることができるので、調味料で分類されやすいが、調味料と栄養素とは無関係なので、調味料は除外することにした。

#### 四 今後の研究

私たちの研究は、「煮る」という調理に関して現在三視点のうち、第二の視点の途中までであるが、残された視点よりの検討こそ特に重要であると思う。調理技術がいかに科学的知識や合理的な方法によつて裏づけされていても、家庭生活における人間関係の民主化・生活様式の合理化と結びつくものでなければ単なる技術としての意味しかないからである。この点をふまえて、研究をつぎのようにつづけていきたいと思う。(前項3に続く)

- 4 方法と食品との関連—指導要領に示されている教材の検討—  
各視点より検討して位置づけを明らかにし、問題点を検討する。
- 5 他の手法との関連—炒め煮など—
- 6 教材としての最低必要量の決定
- 7 教材配列  
(清水薫・江川良子)

#### 家庭科研究会に

##### 御参加ください

連盟では、東京にちかい現場の先生がたが中心になって、たびたび五群の研究会を開いてきました。会員の皆さんの御参加をお待ちしています。くわしくは連盟の研究委員会あて往復ハガキでお問合せ下さい。(住所は巻末にあります)

<第一表>

	いも類	穀物			大分類	食品分類
		麵	粉	粒		
黒あずき	甘馬鈴 やまいも・里芋	スパゲッティ	干とうめいど マカローニン	小米粉 そば粉 くず粉 片栗粉	米 麦 粟 玉蜀黍	「煮ること」による食品の成分の変 化と(意味)
	でんぷん VA B <sub>1</sub> C	でんぷん	同上	同上	でんぷん (VB <sub>1</sub> )	
	でんぷんの糊化 (消化をよくする)	でんぷんの糊化 (消化をよくする)	でんぷんの糊化 (消化をよくする) (粘稠性の利用)	①ゆでる ②煮つけ ③煮こむ ④煮ふ ⑤くめる つくだに ◇溶出液 として① そのまま ②どろみ	でんぷんの糊化 (消化をよくする) (組織の軟化) ビタミンの破壊	調理の 分類

果物類	魚介類・獣肉類	卵類	
		魚卵	鳥卵
緑黄のもの			
みさにか小ほ やえんぼうれ んどじちん草	ゼラチン 蛤・あさり い・か・たこ 鯛・まぐろ いわし・さんま 肝臓 鯨肉 馬肉・鶏肉 牛肉・豚肉 牛・豚肉	白かた ずらの このこ	あうに ひずと るらり
VA B <sub>2</sub> C Fe Ca	VD VA 脂肪	VA, D 蛋白・脂肪	VA, D 蛋白
水溶性成分の溶出 溶出成分の破壊	水溶性成分の溶出 (組織の軟化) (殺菌)	蛋白質の凝固 (殺菌)	蛋白質の凝固

<第二表>

食品の成分の変化	(a) 水分の増加(ときに減少) (b) 熱と水によるでんぶんの糊化 (c) 熱による蛋白質の凝固 (d) 熱による脂肪の溶出 (e) 熱によるビタミンの破壊 (f) 水による水溶性成分の溶出 (g) 水による溶出された成分の酸素と熱による破壊	調理上の意味	殺菌 消化をよくする	不利な点 食品の形がくずれやすくなる 栄養素の損失
	ダシとり(呈味成分) 組織の軟化 ダシとり(呈味成分) アクぬき(不味成分)		栄養素の損失	

類	えんどう豆	そら豆	うずら豆	大豆	味噌	味あけ	あぶらあげ	豆腐	高野豆腐	ゆば	豆
	でんぶん	VB <sub>1</sub>		蛋白質・脂肪	VA・B <sub>1</sub> ・Ca	蛋白質					
	でんぶんの糊化 (消化をよくする)	(組織の軟化)		ビタミンの破壊 (組織の軟化)							

<第三表>

食品	「煮る」方法の分類	調味液の浸透度				
		ゆでる	煮付ける	煮込む	煮含める	佃煮
		そのまま	凝固度 つどろみをつける			

海藻類	野菜類	
	淡色のもの	
寒天	わかめ わかかんぶよ 浅草のきり ひじき	大根・白菜 キャベツ・玉葱 たけのこ れんこん りんご
(炭水化物)	VA Fe Ca	Ve
	(組織の軟化) 水溶性成分の溶出	同 右

# 教育を確実なものにするために

家庭科の先生がたへ

伊藤忠彦

## 一、応用問題が解けますか

家庭科の、ある研究会の席上ということにしておこう。先生方の発表を聞いてみると、とても素晴らしいことになりそうなのだ。

「日本の家庭もだんだん民主化されてきた。あともう一步である。生活改善の運動も盛んで、次第に合理的になつてきた。もうちよつとのことだ。」

たとえば実践報告として次のように語られる。農民の頭は封建的な意識でつまつている。というのは「肉」を食わぬからである。そこで家庭科の女の先生が、村の保健所と協力して、食生活改善の運動を起した。するとどうだ。農民の考え方も進歩してきた。栄養が良くなると頭の方の血めぐりもよくなる、というわけらしい。

家庭科の先生が、オ裁縫やオ料理の講習会的な技術指導に終始するのじやなくて、日本の・町の・村の・生活をよくしていくことに実践的に参加しておられるのには大賛成だ。そうあつてほしいと思う。しかし、そうした実践がこんなものであるなら、私は指にツバをつけ、その指をマユへのばして二・三度こすつてみたくなる。そして次のような場合にはどうしたらいいのかと、たずねてみたいのである。

《仏壇》 私には父母がある。まだ、というや変だが健在で、その家に仏壇があるのである。ところで私は長男で末っ子、つまり一人息子なので、両親が死んだら、その仏壇は他の家具とともに私が所有することになる。使いものにならぬ家具は売りはらうとして、仏壇はどうしたものであろうか。家庭科の先生方の努力のたまものかどうかは別として、最近の日本の住宅は合理化しつつある。家具も備え付けが多い。とくにアパートかなにかの、限られた面積では仏壇は邪魔であろう。そして何よりも、私も妻も仏教信者ではないし、子どもたちも今のところ信者になりそうもない。とすれば、売りはらつてテレビでも買った方が、合理的というものではなからうか？ アア、そういう時は売つちやうんだよ、と教えてくれた人もいる。とくに今が、売り時なんだそうだ。私も相当合理的に物事を考え処理する方なんだが、この仏壇だけは、売るとなるとムネがいたむのである。頭が古いのであろうか？

《さい銭》 今年の正月、子どもはどこかへ連れて行けというしふところは寒いし困つた。そこで近所の、有名な神社へ行くことにした。大変な人出であつた。着飾つた人々のなかには、アメリカ人の家族づれも相当いた。その流れに入ると、高い石段を自然と登る



ことになる。登りだしたが最後、一方交通になつて途中で降りるわけにはいかぬ。石段を登りきつて下界を眺める余ゆうもない。人の流れは、さらに急ピッチとなつて神殿へ近づくと、気がついたら私たちも、特設の「さい銭箱」の前にいた。私は社会科学者であるから科学者らしく、さい銭箱を観察した。今年には神武景気という。はたして好景気は、さい銭箱にどう現われているかと。千円札はなかつた。最も多いのは、白い小さな一円だまでであつた。十円だまも沢山あつた。百円札はチラホラ。そこで、神武景気とさわぐけれども、それは国民大衆のものではないという、私の考えが実証される一つの資料を得たわけである。さて、社会科学者である私は、満足して人波にゆれて神前を離れるのであるが、ちよつとした動揺が心の内に起つた。私はまだ、オさい銭を投げていないのである。神殿の奥から、タダでは帰さぬゾ！ パチを当ててやるぞ！ という声がある。この混雑、このごろの交通事故、なにかが起る可能性はある。『さわらぬ神にたたりなし』というから、ここはオダヤカに、一円だまぐらいは提供しておくと、トッサに考えた。結論的には私もオさい銭を投げたのであり、頭の中ではなにを考えているかと、行動においては、愚ろかな民衆の一人であつた。これはやつぱり、私の勉強が足らぬことなのかしら？

以上の二つの質問をしたら、日本においては今や家庭の民主化は進んでおり生活改善も盛んで、しかもそれは家庭科教師の力にるところ大なのである、テナ結論になろうとしていた席上に、ちよつとして異様な空気が巻き起つたのである。

——その通りデスわ、先生はいいことをいわれましたわ、民主化

や合理化も結構ですけど、やはり信仰というのは……エ、なんと申しましようか、それはそれは——

「ああ、ちよつと、ちよつと」これは司会者の声である。とんだ男がまいこんだものだ、ぶちこわしてはないか。最近、いろんな会合に、こういうブツソウなヤツが潜入しつつかると聞く。コヤツもその一味、右翼か資本家のマワシ者、ひよつとすると、かの自由文数人連盟とか日本教団連とかいう、あやしい者ではなからうか。そう司会者は思つたのであろうか、私への視線はイヤにつめたたく気味悪いものであつた。しばらくは、ガヤガヤと発言が隣り近所で行われ司会者が意味のよくわからぬことをいい、私もトマドつた。そのうち、先程の「信仰」女史の太つた大きな声が、皆のオシャベリを制止した。

《かけせん》 信仰女史は、丸顔の金ブリ眼鏡からときどき私に同意を求める視線を投げつつ次のように語つた。民主教育では、教師は、かけせんナンテ迷信のようなものであつて馬鹿げている、やめたほうがいいと教えた。しかしそれでは、おじいさんおばあさんが納得しない。そういうふうなことばかり教室で話すものだから、教師は赤い、といわれたりするのだ。父母と手を結ぶ教育、といわれだしたのも、こうしたことを反省する気持からであらう。

すると他から発言があつて、だからといつて、かけせんはそなえるものだと教えるわけにはいかぬだろう。子どもたちには、そなえるべきでない教え、年寄りにはマアそうさせておけばいいではないか、こういうことで、おウチの人と対立したりしないよう子どもに注意しておく程度にとどめるべきだ、というふうなことになつた。村や町や日本の、生活をよくしていこうとねがつておられる家庭科

の先生、あなたはどうですか？ 以上あげた三つの応用問題をどう解かれますか？ それとも、そんなことは家庭科とは関係ないのだと、ノー・コメントでありましょうか。

## 二、家庭科のねらいは何か

「家庭科は、昔の家事裁縫とはちがうのだ」「旧態依然とした技術偏重の家庭科であつてはならぬ」というふうに、現実はあるいはそうではなからうと、研究会などでは当然のこととして語られるようになつてゐる。

「男女共通必修の」「一般教養として身につけるべき」たいせつな普通教科の一つであるということも、研究会などでは常に耳にするようになつた。

だから家庭科の教育内容としては、家庭生活は人間関係を根幹とするから、第一に民主的な家族関係をつくる家庭人の育成、ということになる。これを中核として第二に、健康・休息・能率・慰安等の問題、生活様式をどうするかが問題となる。そして第三に、第一・第二の基礎の上に家庭技術の指導があるのだ。けつして無方向の技術中心主義に陥つてはならない、ということが最後にくりかえし注意される。およそこういうことなら、なにかの雑誌や研究会などで、だれでも一度か二度は聞いて知つてゐる。

家庭科のあり方を以上のように理解することは正しい。そして、こういうことを強調することが、今日でもなお必要なのであろう。まだまだ古いものが現場には多く残つてゐるのであるから。

家庭科のあり方をそのように理解して、その上で私の疑問は次のようなかたちでてくる。

ある山村の学校へ、新しい先生が着任した。その先生は、いくら

学校で熱心に教えてみても、ことごとくそれが家庭生活のなかでプチこわされるのを知つた。そこで、母親の集りの席上、こうブツタのである。

《電気洗濯機》 皆さんはとても多忙です。教養の時間も育児の時間も無い。母親がそんなことでは子どもだつて立派に育たない。どうですか？ 電気洗濯機を買つてみては？ 便利な運具を使つて余分の労働と時間を節約する。そして余つた時間を自分自身の教養にふりむけるのです。三時間の洗濯なら三〇分で仕上りますよ。

そこである母親は、とても無理して電気洗濯機を買つたという。たしかに時間は余つた。すばらしいことであつた。さて「教養」にとりかかりましたようと、手始めに新聞をとりあげ、ああ新聞見るのも久しぶりのことだナと、いい気持で読んでいたら、背後から異様な視線が注がれているのに気づいた。つまり、オシュウトメとかいうあの意地悪い種類の視線が、射込まれてゐたのだ。アッこれはいけない。ということと結局は畑に出ることになつた。今までなら、タライの前にとつかと腰をおろして、あるいは昔のロマンスかなんかを想いだし、あるいは居眠りでもしながら、とにかく時間をすごしたのである。そして、ウチのヨメは働き者よとよろこばれもしてゐたのだ。それが電気洗濯機を買つたために、余分に働かねばならぬ。オートメーション化された工場で、労働者が以前よりもひどい労働強化にあえぐのと同じように。

こうなると、新米教師が好意からでたものであつても、結果的には「お母さん、早く死んだ方が楽ですよ」といつたことになるではないか。

だからこそ教育という仕事のむつかしさに気づかねばならぬ。家

庭生活の合理化がことばではいえても、とても困難なことだということを知らねばならぬ。いや、そうした才説教は聞きあきたと先生方はいわれるのであるか？ 家庭科は洗濯機の便利さをタタエルだけでなく、家族関係を民主化していくことを基本として扱わねばならぬことの証拠であるといわれるか？

その通り。ここに著名な学者先生の御登場をおねがいしよう。その先生は、家庭を完全電化しようとの悲願をもつておられる。ただしお金がない。そこで、タルを購入する。それを風呂場へすえる。タルには洗濯物と石ケンとお湯を入れる。そして、風呂へ入る時に先生も四人の子どもさんも、みな足でタルのなかのものをエッチラオッチラふむのである。これぞ動力は電気ではないけれども、その原理においては電気洗濯機に匹敵するではないか。ヨウは、先生の奥さんを想われる優しい心の問題、子どもさんのお母さんに対する親孝行の気持の問題ではなからうか？

このような家庭内の人間関係があつたならば、電気洗濯機も確かに便利な道具といいえよう。家族関係を中核とする家庭科のありかたは、ここにおいて完全に本モノとなつた観がある。技術を技術としてだけで教えるのではなく、人間関係もそれだけとりだして教えるのではなく、両者を結びつけて教えるところに家庭科の素晴らしさがあるのだから。

このように見てくるとこれでよさそうなのだが、どうだろうか。たとえば、これまで比較的うまく家族関係が結ばれていた山村の家庭に、洗濯機をいれた場合はどうだろうか。ますますうまくいくのかどうか。嫁は仕事が楽になつた。嫁とくらべたらワシは忙がしくて損だ、なんて気持にまわりの人がとりつかれぬだろうか？ 相

対的に損をしているという気持はよくあるものだ。女性には特に多いのではないか。足を引っぱりあうではないか。こうなると、家庭の民主化のために導入すべき機械も、それぞれの条件を適確におさえた上できめるべきだ、ということになるだろう。山村の家庭と都市のトモ稼ぎ家庭とはちがうわけだ。これが第一の問題点なのである。家庭科の先生は、このような条件を分析しうる社会科学的な知識をじゆうぶん身につけておられるだろうか。

こういう意味で私は、家庭科は日本の悲劇を一身に背負つた、とてもムツカシイそしてやりがいのある教科だと考えている。そして家庭の悲劇の象徴のような女性が、圧倒的に数多くこの教科を担当しておられることに、拍手を送りたい。

### 三、明日を創るエネルギー

家庭科教師は、それぞれの生活条件を分析しうる社会科学的な知識を身につけねばならぬ、といつた。問題の第二は、それぞれの生活条件のうち、次にのべるような「明日を創るエネルギー」を感じとつてほしい、ということである。感じとれるかどうか、ということである。

封建性の根強い家庭で、日本の婦人は過労におちいつている。そして体力でも女性性は男性に劣つている。とすると一斉に女性の方が早死しそうなものだが、そうでない。どうしてであろうか。便所へしばしば行つて休息しているからであるか？「コノ糞ッたれノ」とドナルのここからきているわけであるか。

あんな怠け者の酒呑みと、よくもまあ別れずに連れそつているなあと思議がられたオカミさんが、酒屋で亭主のために酒を買い、ググツツと一口のんでから、これに水を足してくれと酒屋に言つた

という。帰つて亭主に差し出す。なんだコノ酒は？ 水つばいじやないかといつたらしめたもの、＼ああそうかい、いつもの通りだよ。気のせいじゃないかい」と軽くあしらう。そして溜飲をさげるわけだ。こういう抵抗がしばしば試みられて、怠け者の亭主と連れ添うのも案外本人は楽しんでゐるのかもしれない。

最近の子どもは、民話《傘屋の彦一》を聞いて、彦一はウソつきで悪いというそう。ウソをつくのは何でも悪いと、教えこまれてゐるからだ。ところが昔は、殿様にはウソをつかねば農民・町人は生きていけないのだ。そのかわり、農民同志とか仲間同志でウソをつくと、とんでもないことになる、というふうにならんと別にして子どもに教えていたようである。

つまり、封建的な経済・社会体制のもとで、支配階級は「服従」の道徳を強要してきた。ここまではよくいわれることである。ところが被支配階級は、圧制にたえ、そして生き抜き、たえるだけではなく、新しい経済・社会体制をつくる努力をしてきてゐるのではない。しかも表面は服従してゐるようによい見えても、内部に抵抗のエネルギーをたくわえてである。

このようなエネルギーが、カンコの声で出征を送つても「兵隊にとられる」「徴兵」といわせたのであり、税金は「とられるもの」「徴税」といわせるのである。教室で、とられた税金は……とうっかりいつて、イヤ納めた税金は……といいなおすであらうか？ いいなおすようなセンスでは、「応用問題」は解けぬのではなからうか。

《かげぜん》の場合なら、なにはさておきまず、「あなたたちのお母さんは戦時中、どなたも、かげぜんをそなえたのです。今日は

無事だろうか、明日も生命を長らえて、といのつて」と話しかけるのが自然ではなからうか。

こういう意味で、家庭の民主化とか生活の合理化を、しん底からねがつてやまぬ意欲が、いつたい家庭科の先生方にあるのだろうかといいたかつたわけである。

女は男に劣るとかいやそうじやないなんて論ずる前に、平和を守ることにおいて、どこの国のだれよりも日本の女性は叫びうるのだということ、しつかりもつてもらいたい。教育の仕事にたずさわるとき、そういう基本的な掬りどころをもつてゐることが、どんなに大切かは今さら論ずるまでもなからう。(横浜国立大学講師)

## 夏の研究集会に参加しましょう！

私 たちの研究連盟が積極的に後援してゐる全国職業・家庭科学研究大会は、これまで毎号おしらせしてきましたように、八月六～八日、新潟県高田市で開かれます。(くわしくは前月号参照)

全国の連盟会員が、おおぜい参加して、活潑な論議をかわしたものです。そして、その成果を、この雑誌に反映して、もつともつと、いきいきとしたものにしていきたいと考えています。

もちろん編集部は前日から現地でがんばっています。宿舎で会員のかたがたと、さくばらん話しあう時間も用意してあります。

## ひ

とつ、この機会に常任委員の人たちや編集部への注文や、はげましのことばを、充分に、いただきたいものです。それとともに会員同志の親しみを、うんと増したいとねがつています。

△編集部▽

# 都市の第一群を、こう考える

高橋 太郎

## 一、まえがき

都市地域における農業分野の実践は、旧学習指導要領によつておこなつていたような「実生活に役立つ仕事中心」的な考え方や、「啓発的経験」的立場にたつて、「学校の美化」とか「家庭生活への協力」などという単元の一部としてやる限りにおいては、大した問題ともならなかつた。

しかし、職業科が産業における基礎的技術を習得し、それを通して産業のもつ国民的課題を理解して、さらにこれととりくむ科学的生産人の育成をめざすためには、第一群も当然その一環を担当する重要な一分野として考へなければならぬ。都市地域の中学校の場合、どのようにしてその目標を達成させるかは極めてむずかしい問題である。

いふまでもなく、職業科を一般技術教育のための教科とするには、基礎的技術や技術的知識、社会経済的知識は、当然仕事を媒介として学習されなければならないが、第一群と

くに栽培の仕事は、生産のおこなわれる土地（圃場）がなくてはほとんど学習することができない。農業生産において、土地は労働対象であり、また労働手段でもあるという二重の性格をもつた、欠くことのできない要素であるからである。

ところが、いわゆる大・中都市の中心部にある大部分の学校は、各学年一〇学級以上にもなる多くの学級をかかえていながら、施設・設備は皆無といつてよい状態であり、特に圃場の整備については校内の空地等利用するほかは望みなく、それさえどうしてもできない学校もある。

このような環境のもとにおいての第一群の指導は、教育内容としてなにおさえ、どんな仕事を選定し、学習指導としてはどうやってその一般目標を達成するかは、職業科教育に関係する全員の協力によつてあるべき姿が見いだされ、一日も早く正しい軌道にのせなければならぬ。

## 二、教育内容について

農業に関する技術をとりあげる場合、労働対象からくる技術の性質の差によつて、栽培・飼育・農産加工の三分野にわけられるが、教育的価値と可能性とからみて、共通学習の領域として栽培分野がおさえられることは当然である。すなわち日本農業の現状と将来を考えたとき、基礎的技術および技術の背景としての社会経済的知識理解を習得し、わが国の農業生産の実態を限られた時間に理解させるには、栽培的分野から最も適切な分野であると考える。栽培学習の可能性については前述したように特に圃場の整備に難点があり二・三群の可能性に比較すると問題は残されているが、空地利用、空箱・植木鉢利用等の方法によつて狭路をきりぬけなければならない。

改訂学習指導要領では、栽培分野の内容はさらに「農耕」「園芸」「造林」の三項目とし、そのうち「農耕・園芸」をかつこでくり、その両方または、そのいずれか一方を共通に学ぶことにした。そして「農耕」の〔留意点〕の(3)に「この項目は全国の男女生徒が学ぶことが望ましいが、不可能なときは『園芸』にこの項目のねらいを加味して指導す

る」と説明されている。そして「農耕」においては指導内容として、一八の素材を、「園芸」においては二一の素材をあげ（ただしこの両者の素材は内容的にはほとんど共通している）、それには共通に学習すべき内容と環境・性別などに応じて学習すべき内容が含まれており、学習指導書によつて「農耕」において共通に学習すべき内容としては、この項目のねらいからみて食用作物の栽培を主とすべきであろう」（学習指導書一七ページ）とし、また「園芸において学習すべき内容は、一般的には野菜・花の栽培と造園であろう」（同書一九～二〇ページ）と説明している。すなわち仕事の範囲が示めされても、教育内容としてはミニマム・エッセンシャルズまではおさえられていないのである。そこで学習指導要領の「農耕」「園芸」に掲げた教育内容としての一八または二一の素材はさらに充分検討しつくされて、より具体的に基礎的技術的知識および社会的知識理解として指導内容をおさえ、それらを習得するために、可能な範囲における最も適切な作物をとりあげるように研究がおこなわれる必要がある。この立場から栽培の基礎的技術を抽出するならば、それは「農耕」または「園芸」の基礎技

術ではなくて、両者を通じた栽培における基礎技術となるであろう。

#### (1) 栽培の基礎的技術

このことについてはやくから本連盟において研究が進められ、既に本誌にも詳細な発表がなされている。（第一巻第五号・第四巻第八号等）

作物の生産過程におけるおもな作業は、そのしかたとともに、理論的根拠や目的が同時に理解されなければ、基礎的技術を習得したということとはできない。たとえば、「種子をまく」という作業はどの作物の栽培にもおこなわれる重要な作業であるが、これは均等な深さの播溝を作る、均等な厚さに種子をおとす、均等な厚さに覆土する、適度の沈圧をするなどの技能と、なぜ均等な厚さに種子をまかなければならないか、なぜ均等の厚さに覆土しなければならぬか、どうして適度の沈圧をするかなどの理解が同時になされなければならない。これらは発芽生理・発育と作物栄養・土壤水分の形態等の技術的知識によつてあきらかにされるが、あくまでも特定の場所においての特定の作物の種類・品種についての知識理解にとどまらず、気候・土質・種類や品種・肥料等の条件によつて常に適切な

方法が考えられるような一般的、普遍的にまで発展して理解されなければならない。また気象や作物生理との関連において播種期を決定する能力も養われるであろう。これらの技能と知識が一体となつてはじめて種の「まき方」が栽培の基礎的技術となりうるのである。

以上のようにして考えるとき、学習指導要領にいう指導内容としての素材は、たとえば「農耕と気象」は農耕と気象一般として理解すべきではなく、これは分析して各作業と関連させて具体的知識として習得し、さらにそれが一般化できるようにとらえられなければならない。

栽培においては、技術の構成要素である労働対象、労働手段、労働力は未分化の状態にあつて、技術を「生産過程における機能しつつある労働手段の体系」としてのみ捉えることはできず、労働対象を中心とする「生産技術（増産技術）」と、労働力と労働手段の結合を対象とした「労働技術（能率技術）」とさらに両技術の結合した「経営技術」の三技術の総合として捉えなければならない。

栽培の基礎的技術は、当然これらの三技術を含むものである。基礎的技術として習得さ



れた作業のしかたは、主として「労働技術」に連り、理論的根拠や目的の理解は「生産技術」に連り、さらに両技術の結合が「経営技術」にまで発展することができるのである。

## (2) 社会的経済的知識

第一群は、産業としての農業のもつている基本的性格から、技術の背景としての社会的経済的知識の内容が多いが、これらのうち共通学習として仕事と関連させながら、生徒に学習させる内容として次のような事項を考えた。これ等は基礎的技術に含まれる栽培技術・労働技術・経営技術の立場から、その背景としての社会的経済的知識の習得を目標としたものである。

### 一、栽培技術の発達と農業生産

イ、品種の改良と農業生産

ロ、施肥技術の改善と農業生産

ハ、農業薬剤の発達と農業生産

### 二、農業機械の発達と労働能率

イ、農業労働のピークと機械による労力の配分

ロ、機械導入の前提条件

ハ、機械使用と協同作業

三、農業の経営合理化

### イ、生産費の内容と労賃の割合

### ロ、生産費中の肥料代金の割合

## 四、農業技術の普及経過

これらの仕事に関連する社会経済的知識はさらに統合されて、日本の農業経営の特色、農業と他産業との関係、農業人口の位置、農業の国民生活における役割等を習得する場合の具体的内容となり、それぞれを正しい理解にまで導くであろう。

## 三、学習指導について

都市地域においては、前述のように、極めて限られた施設を利用して、学習指導要領の「指導計画の基準」<sup>2</sup>に示された最低時間三五時間の範囲で、栽培の基礎的技術を習得し、技術の背景となる社会経済的知識や態度の習得を図らなければならないが、産業教育的観点から第一群の到達すべき目標をおさえるとき、これら教育内容を媒介する指導単位としての仕事の選定には十分な考慮が払われなければならない。今まで多くの学校において、教科書を中心にして仕事を選定され、栽培学習で習得すべき教育内容をおさえ、指導の重点から仕事を決定するという方法はほとんどなされていなかった（このことは都市地域に限らず農村地帯の学校をも通じて一般的にいえることであるが）。

教育内容を重点的に指導するよう仕事を選定する場合、栽培の基礎的技術の内容としての生産技術・労働技術・経営技術から考察しなければならないが、このうち生産技術的な面からの適切な仕事は多く考えられても、労働技術・経営技術の面からの適切な仕事と思われるものは、「いね」「むぎ」などいわゆる食用作物中の主食作物の栽培以外には見あたらない。しかし「いね」「むぎ」の栽培を実践活動としてとりいれる場合、適当な面積の圃場をもたず、空箱・植木鉢利用などの方法によつて栽培するならば、それはもはや労働技術的、経営技術的意義は失われて、作業の目的や理論的根拠の理解（技術的知識）が中心とならざるを得なくなり、この点においては他のものを栽培するのとなら異なるところがなくなってくる。いやむしろ作業のやりかたから見れば、現実の生産実態からは他作物の場合よりもよりかけ離れた姿で実践せざるを得ないであろう。そこで圃場を中心として他の学習条件をも勘案したとき、とりあける仕事としては草花の栽培、野菜の栽培などの中から最も適切なものを選び、これに前記のねらいを加味した重点的指導を行うことになる。

学習指導書の指導計画の例一によると、

「花」として一・二年生草、宿根草、球根、花木が「造園」として花だん、庭木の手入れが、また「野菜」として、トマト、ほうれんそうの例が示めされている。しかし花木や庭園の手入れなどの例は、それに含まれている教育内容を考えるとき、教育目標を達成するための適切な例とはいえない。これらの例はその目的が基礎技術の習得というよりも、環境美化的なものであり、むしろクラブ活動等としておこなわれるべき内容のものである。栽培の基礎的技術習得の立場からは、草花では一・二年生草をとりあげ、ここでは指導の重点を生産技術におき、生産と自然科学との関係から各仕事のやり方とその目的や理論的根拠が一体となつて習得されるようにすべきである。また野菜では葉菜類、果菜類を中心として労働技術、経営技術にも重点をおき、仕事のやり方を労働技術的知識、経営技術的知識と充分関連づけながら指導し、ここから指導の背景となる社会経済的知識の学習にまで進めなければならない。

また施設として圃場については、真の基礎的技術の習得のためには適正な面積が必要であるが、空箱、植木鉢利用による場合はなる

べく大きいものが少くとも二・三人に一つの割合で整備される必要がある。

これらのとりあげられた仕事は、明確な目標のもとに実践的指導がおこなわれたいと、ややもするとあるいは自然科学的法則性の理解の方向に傾いて理科の実験学習となり、あるいはまた単に栽培に重点がおかれる学習におちいるおそれが多分にある。そこで栽培の継続的学習指導をおこなう際は、終始一貫して一般技術学習としての目標を見失わないよう留意しつづけていくことが肝要である。

#### 四、むすび

日本における人口(就業人口)の約四七%を占める農業就業者の零細な経営は、その大部分が家族経営からの多量の労働投下と、化学肥料の多肥によつてようやく支えられながらなお国民食糧の自給率はわずか八〇%程度にとどまり、農民一人当りの労働生産性は先進諸国の1/10にも達しないで貧困にあえぎながら生活している。都市地域の生徒にとつてはこれら農業生産の実態や農村生活の実態については、日常の生活経験や学校における社会科等の学習によつて断片的にあるいは平面的羅列的に理解されても具体的にまでなつて

いない。しかし農業における生産の実態を具

体的に捉えることは、その課題の正しい認識をえさせ、農業の改善・向上についての問題意識をもたせ、また他の産業、ひいては日本の国民経済、国民生活を理解する上にも絶対不可欠の条件である。このようになるためには、農業のもつ基礎的技術の習得と、技術の習得を通じた社会的経済的理解を得ることによつてはじめて可能となるのである。

以上のように考えると、農業的分野が職業科における教育内容の一環として地域・性別をとわずとりあげねばならない必要な内容となることは、だれしも理解する。しかし基礎的技術(栽培的)の習得を特に都市地域の現場実践と照しあわせ、はたして現状においてその目標が正しく習得できるかどうかを考えると多くの問題が生じてくる。

このことは職業科の基本的性格の上からも速かに解決しなければならぬ。このためには教育内容のミニマム・エッセンシャルズが正しく設定され、さらにこれを実践するためのあらゆる角度からの学習指導法(指導の計画・指導の形態等)が考究され、また一方では施設・設備の充実を全力をあげて図らなければならない。



# 家庭科教育をこころ考える

西尾 幸子

このテーマについては、教研でも雑誌でも単行本でも、いろいろと語られてきました。しかし、くりかえし、私たちがこの主題をめぐつて、問題をさぐつていくところにこそ、現在の家庭科問題が象徴されているともいえます。家庭科にたいしては、さまざまな批判があつて、その科学的な建設はなお今後の課題でありましょうが、それは一つには家庭科がとりあげる家庭生活そのものの複雑さに由来していると思います。複雑であるという第一の意味は、今年の教研でも話しあわれていたように、家庭生活の仕方と家族関係とが緊密にからみあつていくことです。よくいわれるように、お風呂の順序や、サラリーの渡し方などには、家族関係があらわれています。第二の意味は、生活様式や家族関係はともにも、その社会の生産発展の水準や、人人が経済活動の中でとり結ぶ関係や、社会のいろいろな階層の間柄や、さまざまな物の考え方の全体とつながり、これらが錯綜総合された

結果としてあらわれていることです。たとえば農村の蛋白質源は、種類も少く牛乳や卵やにわとりなど売れば高価になるものです。それらは多く「もの目」、客膳、病人食に限つて利用されているようですが、家計や人人の考え方によつては、日常生活にも利用されます。このように家庭生活が単純の現象ではなく、総合された複雑な現象であることが、問題解決にせまる方法、したがつて家庭科の指導や研究を、困難にしている一つの原因だと思ひます。

私たちは昨年の九月頃から、小・中・高校の家庭科の先生、二、三名の集いに始まつて今は十数名となつた家庭科研究のサークルをもつてきました。家庭科を科学的なものへの願ひからの模索です。学者や評論家の方も仲間にはいつてくださつて、有意義な集いになつていますが、ここではこのサークルで話しあわされたことや、今次教研の報告などを念頭におきながら、私なりの考えをのべ

てみたいと思ひます。

(一) 家事労働の社会的役割を正しく評価しよう

人間が物を生産し、これを消費して、人間自身を生み育てる一連の活動は、社会生活の基礎をなすだいな事柄であります。この中で家事や育児は、主として家庭婦人がこれをうけもつていますが、現在のところ、家事労働の社会的役割、したがつて家庭婦人の社会的役割は正しく評価されていないと思ひます。

家事や育児は家族の欲望をみたすためにおこなわれるもので、それによつて作られたものは、もちろん商品ではありません。ですから、商品の生産を基礎にしてなりたつ今の社会では、自家用の製品には、商品にたいするような輝やかしい社会的評価は与えられません。私どもがややもすれば、家事労働にたいしてなにか価値の低いような幻想にとりつかれるのは、遠くはここに原因があると思ひます。

また家事労働は、なお私事にとどまり、人にみられぬ小さな屋根のもので、家族の好みに応じて、いとなまれます。したがつて一人の人間が十分に尊重されない社会では、

第1表

家事従事人口および比率の累年比較

	1951年10月	1952年10月	1953年10月	1954年10月	1955年平均
A. 満14才以上女子人口	2997万	3045万	3077万	3113万	3193万
B. 就業者	1567	1586	1752	1634	1725
C. 失業者	21	13	18	24	28
D. 通学者	210	229	216	230	242
E. 家事従事者	970	975	877	954	928
F. $\frac{E}{A} \times 100$	32.4%	32.0%	28.5%	30.7%	29.1

(註 婦人少年局資料より操作)

第2表

妻の就業状態

1954・2 婦人少年局

職業をもたないもの		職業をもつもの				計
家事のみ	内職者	家族従業者 (農・工・商)	勤務	自営	日雇	
42.1%	6.0	44.6	3.4	2.3	1.6	100.0

家庭生活は軽視され、ひいては家事労働の社会的役割も見失われがちです。右にのべた結果は、やがて家庭科やその教師やこれを選択する生徒への評価につながります。家庭科の先生が、その意義をいくら強調されても、なにか心からは納得していかないような表情をうけさびしさ、つまらなさを感じ苦勞されるのも、以上にのべたような、社会のしくみの深いところに根ざした問題であるからだと思います。

今後、家事労働が軽減される方向にあることは明らかですが、それが家の中でおこなわれようと、社会施設や生産活動の中に移つていこうと、人間が物を消費し、人間自らを生み育てる活動は、それなしには社会生活がいとなめない土台の一部をなすものであることを、まず確かめておきたいと思ひます。

第一表にみられるように、日本の満一四才以上の女子人口中、約三割、一千万近くが家事労働にのみ従事しています。通学者を除いても三千万近くは、就業者も失業者も多かれ少なかれ家事とかかわりをもつています。また第二表にみられるように、日本の妻の約四割は家事にのみ従事しております。家事のみの従事者の推移は、一九五五年には五年前より多少減つており、一方、就職者は同時期に増加の傾向をみせています。しかし、平日において七時間一分(一九五一年農家)あるいは九時間四二分(一九五三年、中小工場労働者世帯)(いずれも婦人少年局調査)というような時間が、家事労働に注がれているのが、日本の現状です。大量の家事労働が、日本の国民生活の土台の一部にすえられています。

以上のような事実を見なおすことによつても、家庭科の先生の自信を回復することはおたがひによろこばしいことだと思ひます。

(二) 家庭科独自の役割を明らかにしよう  
日本の家庭生活は、生活様式において同時

にまた家族関係において、その内容は決して明るく文化的なものではありません。一九五六年の労働者家族問題研究会議の記録は、つぎのように伝えられています。「食関係における発言では、主婦が労働者家族として、その役割をよく認識していることが認められ、労働による疲労の回復を、栄養の補給によつて図ろうとしている点に、主婦の努力が大きくなって出ている。(中略)主婦たちが弁当の副食の作り方の指導を欲している点には、切実なものがある。それは限られた、不足がちの取入で、最大の効果をあげようとする主婦の願いであるが、そのための技術と知識の向上が得られれば、家計は実質的にプラスになるであろう」と。また「一年に一度、暇をもらつて里に帰り、思う存分眠ること」や「お正月に白米を食べること」が唯一のたのしみであり、「藁ぶきの、窓も小さく薄暗く、厩舎が家の中にあるような」農家生活の報告にも接します。

明治以降の、異常な経済発展のかけに、日本の国民生活は哀しい節約を求めて、おどろくほど低い生活に耐えてきました。こういう状態では、民主的な家族関係も、なかなか育たず、むしろ古さと貧しさが、からみあい

支えあつて、家庭生活はいろいろ困難な問題を、かかえております。したがつて、家族の中で人人が、どんな地位にたつにせよ、男であれ女であれ、家族集団の一員として、力をあわせて家庭生活の矛盾ととりくみ、これを解決する力を養うことは、学校教育が負うべき一つの課題だと思ひます。そしてこの力はやがて社会の矛盾を解決する力へと発展するでしょう。このために、とくに家庭科は、科学や思想としてのデモクラシーを、家庭生活に應用し、実践する能力、つまり理科や社会科の法則、理論を家庭生活の中に具体化し、行動化する能力を養うことをめざしています。そして、このことには、必ずず個々の生活技術がともなつてきます。個々の生活技術は生活様式全体の中で方向づけられて、とりあげられます。ここに、他の教科に解消されない家庭科独自の領域があり、役割があると考へられます。

(四) 教育内容をせいいり精選し、系統化をはか

ろう

「時間が足りない」「指導が総花的で教材過多におこまれてしまう」「内容が重複している」「系統性がない」というようなことは久しく聞かれた現場の声であります。第六次

教研の北海道報告書は遂に「この教科の不振の原因は指導内容が複雑多岐で——」とのべにいたつています。すでに現場には学習内容の検討、教材整理の動きが始まつています。小・中・高校の一貫した教育内容の編成は今後の中心課題でありましょう。

この際、どのようにして第一義的な教材と第二義的なそれとを区別して、教育的意味のあるものを選定したらよいか、考察の観点の問題になると思ひます。私たちの研究サークルでは、次の三点をとりあげました。

- (1) 自然科学や社会科学との関係上、意味のあるもの
  - (2) 技術の基礎であるもの
  - (3) 日本の家庭生活の課題解決にとつて、意味あるもの(社会的経済的な意味あるもの)
- この三つの角度から教材を検討して、これらの内容をふくむものが、適切だということになります。

今、調理教材に例をとれば、

- (1) 食品化学や栄養学からみて意味のあるもの
- (2) 調理の基本として加熱法から分けて、加熱しないナマと、煮る、焼く、揚げる

蒸すという五つの方法がありますが、さらに、これらのどれをとつてもおびただしい調理例があるわけで、それを系統的に整理して並べるまでの手続きが必要となります。この点についてまた別の方がくわしくふれられることと思います。

研究のこの段階では理科の先生に協力していただければ、有効だと思います。なぜなら、たとえば煮物の技術を食品組織への液体の滲透度にしたがつて、ゆでる煮る、煮込むあるいは煮ふくめる、佃煮にするという順序に系統化するような手続がたくさんあると思われるからです。

(3) 地域の食生活を改善するために有意義なもの、たとえば、米食偏重の農村地帯であれば、とくに主食の正しいとり方が問題とされます。ここで、その地域の蛋白質源、カルシウム源、ビタミン源、油脂源などをめぐつて考察がすすめられ、生徒の社会的、経済的な眼が開かれることとなります。

第三視点は地域性の問題ですが、社会科学のメスが必要なところなので、ここでは社会科学の先生方のご援助もいただきたいものです。

すぐ役だつようにとの近視の実用主義からすれば、あれもこれもと教材を氾濫させてしまうので、学校教育では、以上のような視点から、基礎的な系統だてられた教材を最少限えらび、児童、生徒の家庭科的基礎学力を、確実に身につけさせることが、現在、もつとも必要でしょう。このことによつて応用の力を強め、「創造の喜びを味わいたい」という生徒の気持をみたくともできません。指導要領の検討という仕事も、この見地からすめたいと思います。

(例) 地域の実態調査は、日本の家庭生活の課題解決の観点から有効にすすめよう

「大裁裕長着……必修三〇時間、五月——九月」というプランは、まだ私たちの悩まされる問題です。山村の奥にいたるまで文化度の幅の広い日本の地域生活を、都市の勉強間で勝手にとり扱つてはならないと思いますが、前記の教材は、学習指導要領にも仕事の例としてだされていますので、少し考えてみましょう。報告された地域の生徒は九割近くが「お母さん方の生活には二重生活は必要だ」と答えています。将来の衣服計画になると「洋服を主とするが和服もほしい」というのは三割余で、七割近くは「わからない」と答

えて指導の十分な可能性を示しています。実習後のお母さんの感想には「長くかかった。もつと早く仕立てるように」「お母さんの時は、その年令にももつと多くのものを仕上げることができた」「手伝つてもらわなくて自分でするように」といった典型的なものが見られます。先生は最後に「大人の考えや家庭生活をもつと思いきつて改善すべきである。まだ伝統や因習にこだわっている」とのべておられます。私たちは、このような現場がなやまされる地域要求を、どうとり扱つたらいいのでしょうか。この点、農山中学校のつぎのような実態調査は、私たちに、ある示唆を与えています。それは、和洋服の着用状況を祖父母、父母、兄弟にたいして、働らく時、くつろぐ時、外出時を春夏秋冬にわけて調べています。その結果、そこには農山村でも、世代の推移につれて「和服から洋服へ」のきわめて顕著な傾向が、実証されています。このような事実を示すことは、地域の生活を明日へと方向づけるのに、百のお説教より有力でしょう。調査は、問題解決の手がかりがえられるように、工夫したいものです。

「和裁をおしえ、生花も必修にしてほしい」というような要求は、実用主義であり、また

女子の花嫁修業につながるものであり、糸機  
の道を失つた今もなお、「きものと女性」へ  
の思いのあつさを語っているものです。「は  
げしい農家労働を思うと、家事労働などは楽  
なものだ」と考えられているところでは、

「縁側で日なたぼっこをしながら、ゆつくり  
着物をひろげて縫うこと」も、婦人のたのし  
みとさえなつていきます。こうなると、家庭問題  
は、もはや教育による解決をこえる多くのも  
のを含んできます。こうした社会基盤からで  
る、前記のような要求については、これを取り  
あげないために、家庭科の先生は評判を悪く  
しなければならぬといさえあります。し  
かし、おくれた要求にそのまま即することは  
さらにふたたび農村家庭生活の苦しみを生み  
だすものですから、この悪しき循環を納得的  
に有効に打ちきる方法を工夫したいと思いま  
す。

(四) 共学問題をめぐつて戦後の家庭科をきす  
こう「男子には勉強を、女子には家庭の手伝  
い」という伝統的な家庭環境が、一般に男  
子の家庭科の背景をなしています。この背景  
もし細にみれば、母は父より、家庭科の共学  
を支持しています。ところが、この母も男子  
の母ともなれば、女子の母より幾分、家庭科

ぎらいとなります。男子の家庭科を反対する  
理由は、

- 1、男子には不必要
- 2、男子には無理
- 3、家庭科をすると学業がおくれる
- 4、男子が料理、裁縫をするとおかしい  
などがあります。

一方、男子の児童生徒の家庭科のうけとめ  
方を、方々の調査結果にみますと、小学生の  
約七割は「好き」だと答えています。これは  
女子より低い率ですが、前記のような家庭環  
境の差も働いての結果でしょうから、男女の  
公平な比較にはなりません。中学校になると  
好悪の男女差はさらにひらいてくるよう  
です。教育内容も、ここでは、女子に傾斜され  
ています。家庭環境の差に学校環境のそれが  
プラスされ、一方生徒自身の学習内容への批判  
の眼も高まるために、こうした結果となるの  
でしょう。高校では教育課程の上で男子は家  
庭科に無縁な者となります。とくに都市では  
男子の多くは、大学入試の勉強コースを走り  
ます。三一年度から「家庭一般」の女子必修  
が多くなり、こうした事態は、男子にまたし  
ても「家事は女子のみがするもの」という観  
念を定着させていくようです。高校の P・T

・Aで正直なお母さんはいわれます。「お部  
屋は何日も掃除をしない。ふとんはあげな  
い。おべんとうはださない。あれでいいんで  
しようかね」と。家庭科教育の思いもかけぬ  
終着駅に辿りついてしまった感じですよ。いつ  
か来た道に戻つたような気がします。なぜこ  
うなるのか——、それはあながち、大学入試の  
重苦しい黒雲によるとばかりはいえないでし  
ょう。ここでもまた、「家庭生活に關する科  
学的な知識がほしい」という生徒の声に答え  
られるような内容を用意することが、求めら  
れています。その結果、とくに高校家庭科が  
どのようなものになるかは、のこされた課題  
であり、ここにまた、戦後の家庭科教育を、  
戦前の家事裁縫教育から、最終的に区別する  
ことが、かけられているようにも考えられま  
す。

以上、つたないことをのべましたが、家庭  
科を健康な自信のもてるものとするために、  
私たちは、自主的な研究会を各地でもつてい  
きたいと思ひます。

(埼玉県教育研究所)

麓山 京ほか著

## 『家庭管理学』

書 評

最近しきりにこの方面の図書が刊行されている。この分野への学者や実践家の協力が多くなつてきて望み多い建設の息吹きが感ぜられる。

本書にのべられる「家庭管理学」の体系は、つぎのようになつてゐる。まず家庭生活の構造と機能がら家庭生活の中にある固有の法則が求められる。いいかえると、家庭生活が歴史的・社会的な展望の中で考察される家庭生活論がはじめに据えられる。(第二、三章)。

められている。即ち家庭経済や新旧思想の対立、家族相互の期待といつた経済的、思想的、心理的要因によつて、自由な個人生活と家族の協同生活との合理的で融通のきく重なりあいを作りだそうとするところに、新しい家庭生活のあり方が求められている。

象づけられたことは、全篇を流れる考察がダイナミックで、構造が求められており、家庭管理というものにせまる統一した方法がみられたということである。これまでは節約と合理化が併存しているような懸念のあるものもみられたし、ともすれば断片的な現象を並べた常識論に流れ、なにか洞窟の偶像のような思いをさせる家政万能論にもいきあうことのあるこの分野に、科学的な論理を組立てて清新の風を送り、家庭管理に適切なた位置を与えられたことはまことに画期的である。現場の家庭科教育に正しい方向を与える上でも貴重なものである。専門学者の協同参加による成果であろう。ここにこの本の意義と魅力があると思われる。

読後、「家政学」とか「家庭管理学」の成立についての長い間の私の疑問に一脈の光明がさしたような思いがしている。しかしまた一方、つぎのような点については私の疑問は解けないでいる。それは、この学問の成立に関しては、家庭生活論、家族論、家庭経済論、労働科学、被服関係諸科学、食物関係諸科学、建築学などの個別科学と家庭管理の技術さえあれば充分なわけはなからうかという点である。若し仮りに以上のような個別科学で足りるということであれば、第一章の家庭生活のあり方から第一部の家庭生活論の中に入ると思われる。そのようにしても家庭生活のあり方を家庭生活自体から導き出すことは矛盾しないから導き出すように思われる。またたとえば単なる食品化学や栄養学、家庭経済論と食生活の管理論とは、どがちがうかを本書第七章でみると、「食卓の団欒とマナー」、「食品購入の要領」というような部分であろうかと思われる。その他第二部の管理論にこのような部分が見出されるが、これらの部分が他の部分に比して、なんとなく精彩を欠いているかに感じられるのはなぜであろうか。麓山教授も「独自の方法はまだ確立されていない」とのべられている。本書の冒頭にのべられた日本の「家政学」の系譜でもこの学問が他の科学との交流によつて「やせたり母家をとられたり」したことがのべられているが、この辺にもやはりこの疑問をめぐる本質がなにか語られているのではないだろうかと思われる。いつの日かこの点について御教授を願えれば幸いであらう。

なお序説の家政学の系譜も面白く説まれた。(一九五七年三月、光生館発行、三五〇円) (N)



去る四月二五日の午後五時より、国学院大学教育学研究室で群馬大学の吉田元氏をチューターとして、第二群（機械—整備修理）の定例研究会を開催した。

(1) 機械材料の指導について 横浜市宮田中の津田氏などより、具体例が発表され、機械材料として特に時間を設け・金属材料・鑄鉄・軟鉄・特殊鋼・ホワイトメタル・その他の合金、などを取扱い、非金属材料としてガラス・有機ガラス・ゴム・皮ベルト・レザー・ビニール材料など、機械の構造、機能にもとづき、その条件を満足させるように使われていることから指導し、分解・修理などの仕事を通して、金属材料を二時間ぐらい取扱う。鉄の性質と炭素の含有量の関係およびそのみわけかたとして、グラインダーにかけ、火花の型により区別させる例などがだされた。生徒は鑄鉄と軟鉄や硬鋼にたいするバク然とした観念はもつているが、焼きあかめて、打つばあいの延展性や、ドリルによる穴あけの可能性など実習を通して、確実に理解させる重要性が討議され、理科の地下資源の中の金属学習では、機械材料学的立場からみれば不十分であるので指導する必要がある。その進めかたとして、金属材料として別個に取扱

うよりも、工学的目的から、①使用目的 ②使用材料の性質 ③取扱上の注意 ④その位置の構造機能を関連的に取扱うほうが、中学校として効果的であると結論された。

(2) 機械要素、機構について 機械材料と関連的に取扱うという討議の中から、仕事例（自転車・マシン・モーターバイク・石油発動機・農業機械など）についての機械要素があげられ、どのプロジェクトが一番機械要素を含み、学習内容が豊かに取扱われるかが考えられ、自転車やマシンとエンジン機関と

## 第二群研究会

の比較がなされ、前者はプリー・スプリングコイル・メタル・ボールベアリングなどを含むが、電気関係、クラッチ・カムその他の機械要素が含まれていないし、またモーターバイクはバルブカムがないばかりでなく、クランク室の分解は極めて困難で、中学校で無理である点などがあげられ、そういう点からはスクーターが最適であり、農村では石油発動機が適当であるとする論が強く、さらに①

すべりつがい ②まわりつがい ③回転前後進ねじ ④玉軸つがいなど機械の重要な要素が論議され、吉田氏より各機械の要素分析と比較が説明された。

(3) 故障・点検の項について ドライバー・モンキーの使用法、特に二本以上の交互ねじのしめかたとゆるめかたについて、きみつ・ゆるみ、などの関係から交互にしめ、ゆるめることの指導など（シリンダーヘッドの取りはずし）が重要であること、またエンジンおよび自転車を分解・組立・調整する仕事を通して、クラッチ動力伝達装置、カムなどの指導要素を比較させ研究させることが理解を速め、かつ機械要素についての研究に有効であることが討議された。

機械学習において男女共学すべき程度や、女子の機械学習の重要性について話し合い、女子にスクーターの分解・組立て・運転など指導した実践報告もあり、運転については、オート三輪が、指導者も同乗できて安全であるが、分解・組立の指導には不便であることなどが討議された。

(附記) 連盟では定例の公開研究会を毎月開いています。九月以降の予定は誌上でお知らせします。会員のみなさん！ぜひどうぞ。

昭和31年8月特集号(送共54円)

栽培学習における作業の段階と指導の改善

その設備基準(第一群研究委)

第二群共通の学習内容とその設備基準(表)

(第二群研究委)

昭和32年1月号(送共34円)

転換期にたつ学校職業指導(清原)

職業指導科設置論について(後藤)

学校職業指導の目的再検討(鈴木)

社会教育における産業教育(山口)

組合の教研活動について(伊藤忠彦)

昭和33年2月号(送共34円)

労働意欲を失わせたもの(後藤)

オートメーションの正しい理解(稲田)

産業教育運動の強化(池田)

昭和32年3月号(送共34円)

生産技術教育の発展のために(清原)

明日の現場研究に期待する(本田康夫)

新学習指導要領をどう受けとめるか

第一群(草山) 第二群(稲田)

文部省解説資料(第一群)

△以上注文は前金で発行所まで、(本誌は書店販売をしません)

あ・と・が・き

△八月の研究集会までには、どうしてもまにあわせなければ、というわけで、今月号はとりいそぎがんばったのですが……いかがでしょうか?

△各執筆者の方には、「科学技術」「生産」の教育を重視する立場から、特に本誌のために、お骨折りをいただきました。

△高田集会のための連盟提案は、紙数の関係で、その「あらまし」しか掲載できませんでしたが、それだから実はみなさんの力と手をぜひおかりしたいわけです。

△それにつけ、暑いさなかの研究集会ですが、発表も討議も「話しあい」も、十分に思いきりして、知りあつたおたがいの「結びつき」を一層確かなものにした、本誌はそのかけ橋の役わりをはたしたいと願っています。

教育と産業・八月増大号

(通巻第六十四号)

昭和32年8月5日発行

特価四〇円(送料四円)

編集兼 村田 忠三  
発行人

東京都目黒区上目黒七の二七九  
発行所 産業教育研究連盟

本部 国学院大学教育学研究室内  
(振替東京五五〇〇八番)

▽書店販売せず直接注文のこと。

▽会費前納の会員に毎月送附する。

▽会費年四〇〇円・半年二〇〇円

▽入会者は会費を添えて申込むこと。

(Y)



# 会 員 名 簿 (三)

## 東 京 都

世田谷区深沢町三の四	田中花子	港区麻布霞町	磯野昌蔵	津久井郡藤野町牧野中学校	佐藤光一
青梅市青梅第二中学校	有田 稔	品川区平塚三の八〇一	板倉三郎	中郡大野中学校	磯崎 茂
大田区南千束町九三	草谷晴夫	江戸川区小岩二丁目三〇二六	小山和夫	川崎市戸手町御幸中学校図書係	
新宿区四谷第一中学校	阿部正昭	世田谷区駒留中学校	白金鹿楼	同 右	斎藤利器太郎
板橋区板橋町五の七〇〇	衣笠春子	青梅市立第六中学校	浅見和郎	同 右	鈴木
八王子市子安町八王子第三中学校	同	同 第五中学校	野村素六	横浜市中区本牧元町八〇	佐藤英郎
北多摩郡狛江町岩戸一〇〇五	原 正敏	同 第四中学校	内田 一	中郡西秦野町中学校	山口次正
目黒区上目黒五の二五三八倉田方	川合稻育	同 第一中学校	山村 茂	足柄上郡中井中学校	松本信雄
杉並区天沼三丁目七六一	津田梅子	神奈川県	石川勝蔵	横須賀市芝生二五五浦賀中学校	山本辰雄
目黒区下目黒四の一〇二〇	秦野市平沢一二二一	小田原市立白鷗中学校	遠山正憲	大磯町寺坂林六五一	杉崎進賜
学芸大寮北一二	海野敏雄	津久井郡藤野町牧野中学校	片瀬孝之助	平塚市立大洋中学校	熊坂 忠
板橋区蓮根町一の八	武田幸雄	鎌倉市梶原深沢中学校	草谷貞胤	山梨県	宮川逸雄
中野区本町通六丁目東京文化短大	村田泰彦	川崎市戸手町御幸中学校	川辺久吉	甲府市飯田町西中学校	佐野国武
目黒区緑ヶ丘第一一中学校	柴田尚志	同 右	三島光子	西八代郡栄中学校	鈴木 将
青梅市立第二中学校	保坂末子	横浜市港北区大綱中学校	津村静江	富士吉田市下吉田中学校	鶴田 潔
渋谷区幡ヶ谷笹塚町一三九二	中村皓哉	川崎市立塚越中学校	星奈 登	山梨市八幡北六四四	内藤正巳
練馬区上石神井一の三五八	立和名 鼎	横浜市港区太尾町一一五三	近川タネ	中巨摩郡八田村六科一二七	常金英長
新宿区上落合一の三一八	川辺克巳	横浜市中区羽衣町吉田中学校	杉田正雄	甲府市金竹町四六	石川松太郎
葛飾区細田町奥戸中学校	鈴木精次	足柄下郡橋町橋中学校	桜井邦夫	中巨摩郡若草村鏡中条中学校	望月教三
足立区千住元町足立中学校	秦野市寺山東中学校	足柄下郡湯本中学校	加藤行雄	南巨摩郡甲南中学校	鈴木伯傍
太田区久ヶ原一一三七野田方	小田原市立国府津中学校	福田正作	福田正作	甲府市飯田町西中学校	岡部さつき
葛飾区上平町四九七	大河内康平	川崎市上麻生栢生中学校	青木忠治	甲府市朝氣町東中学校	窪田八千代
			浦辺勸次郎	同 右	藤本富造
			三浦加治馬	中巨摩郡櫛形町小笠原中学校	
			(山梨県つづく)		

予約受付中

# 産業技術教育講座

こんにちの「課題——科学技術教育振興」の基盤を解明し、明日の産業教育の具体的な計画、指導法を大担に示した斬新な企画。小・中・高校指導者はもちろん、企業体教育、社会教育関係者の必備の講座としてすでに各方面から期待されています。

(編集)

国学院大学 豊 治  
後藤 豊 治  
東京工大 清原 道寿  
労働科学研究所 桐原 葆見  
国学院大学 村田 忠三  
国学院大学 太田 卓  
文部省職業教育課 鈴木 寿雄  
その他

## 3 大特色

- ①小・中・高校から社会教育に至るまでの技術教育の系統を各巻でおさえた。
- ②学校教育と企業体内教育の関連をえがいた。
- ③関係用語の概念を統一して巻末に「事典式」解説を付した。

全6巻 (各冊 予価 380円)

## 1 産業技術教育の歴史的背景

- ▶欧米における産業教育の発達
- ▶わが国における産業技術教育の展開

## 2 現代産業技術教育の性格と目標

- ▶現代産業技術教育の諸問題
  - ▶技術教育の組織・性格・目標
  - ▶産業体制と技術教育の動向
  - ▶技術革新の動向とわが国の課題
  - ▶むすび
- 今後の産業技術教育の性格と目標—

## 3 産業技術教育の内容・方法・評価

- ▶学習内容の編成とその指導
- ▶技術教育の内容・方法・評価
- ▶就学前教育における生産の学習・特殊教育における技術教育

## 4 産業技術教育の管理

- ▶産業技術教育の行政
- ▶学習の場の管理

## 5 産業技術教育と生産労働の科学

- ▶雇用・配置と職業指導
- ▶生産方式の発展と生産性
- ▶労働者の健康問題
- ▶労働意欲と生産問題
- ▶職場における人間関係

## 6 世界の産業技術教育

- ▶ドイツ
- ▶イギリス
- ▶ソヴェット
- ▶スイス
- ▶フランス
- ▶中国
- ▶アメリカ

お申込みは……

(販売元) 医歯薬出版株式会社  
電 03 7137-9・振替東京13816

(編集) 東京都文京区駒込片町32 医歯薬ビル内  
(発行)

生活科学調査会